

# 伊賀越道中雙六

座本 竹本 太市

## 第一 鶴が岡の段

地大權聖者の未來記に書き記したる四海の治亂。元弘の戦一統に。切鎖めたる足利氏草も。フシ橋がぬ鎌倉山。ユリ地頃は永元年二月上旬。鶴が岡の奉幣に勅使下着の知らせによつて。山内の執權上杉顯定警衛の役目承り。坂本に假屋をしつらひ一日代りの家中の守護。和田行家が一子志津馬。威儀嚴重に守り居る。地折節佐々木丹右衛門。非番の姿上取つて。下を憐む羽二重侍。假屋に來かゝり。詞志津馬殿。當日のお役目御苦勞と挨拶し。別して今日は勅使御入の日なれば。取分けて大切の御番。随分塵末のない様に。

と申すも此丹右衛門。貴殿の親父行家殿に劍術の門弟。これ迄外の弟子よりも。格別に御差圖下されし師匠の御恩。山よりも高ければ。其御子息の志津馬殿。次第に立身もある様と神に心願を籠め奉り祈る程の拙者が心底。日頃から齒に絹着せず申すを。必ず氣にはさへられな。地貴殿の疵は御酒參ると萬事を忘れさつしやる。色と酒をば敵とせよとは賢者の誠め。常に此儀をお忘れあるなと眞實あまゐる。意見なり。聞ハア忝いお示し。衆々親どもが申すにも。劍術の高弟といひ。若けれども實義ある丹右衛門殿。兄弟同然に。萬端を相談致せと申付け置かれたれば。其許様を兄と思つて居ります。

イヤ左様請けて下されば。拙者は何より甚だ祝着。弟子傍輩の事を申すは如何なれども。氣の許されぬ男は。澤井股五郎。彼が従弟城五郎は。鎌倉殿の昵近衆。直人一家に持つたと鼻にかけ。御前の勤めも疎かにして。晝夜遊所に入込む由。必ず彼を友になされな。昨日は拙者が番。今日は非番なれども内證ながら。見廻りも致さうと存じて推參致した。地勅使のお入に間もあるまじ。別當へ參つて配膳の。勝手案内見て參らう。後刻。フシ〜と別れ行く。地折柄うそ〜來かゝる町人。番人聲かけ。ヤイ〜何處へ行く。御假屋の前。すざりをらうと口口に。嚙付けられて犬躰踏。詞ア、イヤ私は切通しの町人。本庄屋定七と申して。和田のお家へお出入の者。地志津馬様に用事あつてと。聞くり志津馬。苦しうないこれへ參れと傍近く。詞今日は勅使

御入の社内故一々人を檢たむる。急用か。何事ぞ。ハイ。イヤ別儀でもござりませぬ。彼の金子の儀を。コリヤ〜。イヤサ家来ども。其方どもは南門へ參つて人を通すな。地残らず行けと、ッ追ひやれば。詞ハア如何様金銀の事は内證。爰で申すは不調法。アイヤ〜契約の日が延引すれば無理とは思はぬ。が此事は股五郎殿を頼んで置いた。一兩日猶豫を頼むと。地話し半ばへ大小も。金拵へのつかつかと。入来る澤井股五郎人を。非に見る。

ッシのさばり顔。詞ヤア定七。お手前が來た筋は。股五郎が吞込んでをる。部屋住の志津馬殿吉原通ひの内證金。今用立つて置いたれば。豫てお身が願うてをるお國の掛屋に仕てやるさ。時に志津馬。頼みがある。身が懇意にする町人の女房今日勅使のお入を聞いて。都人の装束姿拜見させて下されと。據よこなく願ねがふに付き。

地裏門からこつそりと。最前社内へ入れて置いた。爰は粹な貴殿なれば。詞大目に見てくれまいか。どうぢや〜。ア、イヤ〜。町人たる者殊に女。左様の事を政道する志津馬が役目。地外の者の見ぬ中に。一時も早く追歸されよ。詞ハテ左様堅う言うた物ぢやないわい。コレ貴様の好の女だわい。マアちよと好い女房見たがよい。器量はどてん天人姿天降りしてお目にかけて。地此處ぢや〜と手招きに下り来る坂の段かづき。屋敷か町と三重の帯。ッシ堅う見せてもしどけなく。志津馬様わしぢやわいなと。地被を取れば松葉屋の。ヤア。瀬川ぢやないかと志津馬が悔げり。詞ナント股五郎は粹ではないか。何が一日逢はねば百日と。吸付き合うてをる中。身どもとは違うて親持の身分。此間より御前勤めに間がなうて。廊へ來ぬを女氣で若しや心替りかと

案じるが可愛さに手工合して今日の參會よもや腹も立つまいが。コレ太夫嬉うれしいか〜。遠慮なしに。しけれ〜と。地突きやられてひんとすね。詞女中法度の此お假屋追ひ去なせと仰しやつたは。よく〜私がお嫌ひさうなど。地思はせぶりの雪の梅解けぬ、ッシしかげがそれしやなり。詞イヤサ。さうではなければ。これは又きつい所へ連れて來た。御門は誰が通したぞ。イヤ此實内奴でござりませぬ。スリヤ御門を通したは汝が。エ、憎い奴。とはいふもののおれも顔が見たかつたエ、疾から左様碎ければよい。堅い顔が氣にくはぬ。家来どもは散つて仕舞うた。實内は志津馬の腰付。廊の供する粹奴。かう寄つた所はとんと廊の座敷になつた。大夫主のお持たせこれへ。ナイ地と返事は奴の遺手。時繪の提重角樽は股様よりの御見舞。詞吉彌煙草アイ地と

跡引く長烟管トタバコ。小オケリほどいて取出す。打掛姿立木の櫻あたり。フシまばゆく見えにける。地先づ一獻と股五郎大盃引受けて。詞サア志津馬慮外申す。イヤ今日は大禁酒ぢや。というてあの君が顔見て飲まずには居られまい。ちよつと一つは身の養生。飲めば甘露の菊の酒。其盃定七に差召され。大事な一つ飲みやれ。扱盃を差して置いて。お手前に頼む事別儀ではない。此瀬川と此通りに深く言交した中。所にさる大家から身請の相談。先方は千兩二千兩惜まぬ家柄。慾に喰付き親方が其方へやらうといふを。先約なれば志津馬が方へ。五百兩で身請さすると。此股五郎が突張つて置いたれど。今日明日に迫つた日限。これまで取換もある上なれば。用立つてくれまいか。ハイ。そりやはやあなたの方のお頼み。いかにもとサ申したけれど。部屋住の志津馬様。

儲な抵當がなければ。ヲ、サそれも思案して置いた。和田の家の重寶正宗の名作を。質物に差入れる。これ程儲な抵當はない。イヤコレ股五郎殿。其刀は先祖より傳はつて。常の差料には致さぬ重寶。質物に入れる事はハテさて悪い合點。其大切な刀ぢやによつて書入れて間に合すのさ。金さへ濟せば凶事はない。殊に此度武將の若君。御元腹の御祝儀。諸大名より名作の劔ツルギ上あるべき折から。正宗多き中にも和田の正宗は勝れて無双の名作。殿より御所望あるは必定。其時に無ければならぬ大事の刀。暫くの用に立て。其中には股五郎が工面して取返す。氣遣ひせずとサア志津馬。其趣き一札書いてお渡しなされと。地色々付入り正宗を。仕てやる心の劔とは。白紙取つて認むる。若氣の思案ぞ。フシ是非もなき。地定七證文懐中し。そんなら金子調

達致し。股様方迄持參致さう。質物は結構なれど所詮此方の物にはならぬ。御返濟の違はぬ様に。氣遣ひするな身が一門は歴々。金銀澤井が吞込んだ。よござりませす。が申し言はぬ事は聞えぬ。利銀は二割三月をどりでござりますと。地慾の願。股五郎に。フシ詞番うて立歸る。詞サアコレ祝うてこれから祝言。天下晴れての志津馬が奥方。目出たい打つて置けしやん。地調子に乗つても一つ大事か二つも三つもいつの間に。酔が廻つて役目の大事。忘れるめれんにしてやつたと。詞笑壺に入つたる股五郎。媒人は酔の紛れ。積る話をゆるりと瀬川。地暫く粹を涌さうと。跡に難儀を掛作。廊下へ抜けてフシ行くともしらず。詞股主々々どれへござつた。ぬけそとは手が悪い。人をころりと殺して置いて。逃げろとは卑怯者。エ、コレナ。此様な嬉し

い中に。殺すの死ぬのと氣にかゝる事ばかり。そんならおれと祝言するが。そなたは眞實嬉しいか。とあれれ我等も千萬祝着。此悦びに又一つ。ア、申し其様に御酒上つたら御用とやらの害になる。もうこの盃は止めせう。止めにせうとは祝言がいやか。いやでなくばま一獻。たとへ知行召上げられ。歌ふちは瀬川になるとても。二人手に手を引き合うて。どんな川へも志津馬は本望。もう主も親もいらぬ殺せ〜と。地酔狂も物がいはする。フシカリくだ枕。膝にたわいもなき折から。勅使のお入と呼はる聲。聞くひとしく丹右衛門。志津馬はいかにと駆着くれば。詞南無三寶例の沈酔。コレ志津馬殿〜。コレイナ。太夫様を待たして置いてあの様に寝てぢやわいなア。地こそくり起そと二入して。抱き起しても。とろ〜目。詞コレ志津馬。正氣

を付けやれ勅使のお入ぢや。イヤ猪口は嫌ひ。こつぶで致さう。エ、何いうても死人同然。一世の浮沈何とせん。家來ども此女裏門から追返せと。地替袴の肩衣を。身に引つけて志津馬が代り。オッリ勅使を。出迎ふ深切も夢にも。フシ白川高射。松吹く風も音添へて。後の難儀と。和田の家世の成。行こそ三三定めなや

## 第二 行家屋敷の段

地春毎に。詠めは飽かぬ鎌倉山。仁義を守る武士も。且に隠す桐が谷。地和田行家が一構へ書院先の遺水も。打手に靡く腰元仲間塵取役や掃除番。フシ其役々を割付けて。地一つ所へ寄りたかり。詞何と玉木どう思やる。今鎌倉のお屋敷ではどの若旦那がよい男。ア、コレおきや〜。とても男を吟味しても生物は入れ

られぬ。乾物で仕舞うておきや。生物をたへ過すとお谷様がよい手本親の赦さぬ淫奔と親殿様の御勸當。毎日々々お詫言に御出なさるゝは。おいとしい事ではないか追付けお越しなされたらそなたの部屋に置きまして置いてたも。思はぬ話で暇入つた。地必ず晩の宿下りに。假寝の床のふつてりと。握りこたへのあるのをば。土産にフシ頼むと打笑ふ。地一間の襖明暮に。血を分けし子と血を分けぬ。義理の葛にからまれて。柴垣一間を立出でて。詞何をぞわ〜腰元ども掃除仕舞はば勝手へ行きお谷殿をこれへ呼びや。必ず〜目立たぬ様にとありければ。地ハイと答へて腰元ども皆々。フシ勝手へ入りにけり。地今日も又何と言寄る方もなく。詫にお谷が綱切れて。フシ悄々として座に直る。詞心からとは言ひながら。我が内ながら人目を忍び。夫に

付添ふ女の道政右衛門事は我が夫のお氣にも入り。天晴の達人なれば今日や殿へ御目見え願はん翌日や取次せんものと思召したも恩が仇。其方が連れて立退きしは不屈者と御勘當。自らが身にも成つたも。世繼と定まるあの志津馬傾城狂ひに身を持崩し。萬一御沙汰あつてはと御前勤めの願ひを下げしも我が子を思ふ夫のお情。世間の取沙汰口惜しく。繼子繼母の隔てある柴垣とばし思やんなど。地夫に隨ふ貞女の道。言聞かされて羞俯向き。ッシとかう詞もなかりしが。地漸うに顔を上げ。何とぞ今一度父上のお赦しあるお詞を。お願ひなされて下さりませ。ヲ、其事は氣遣ひあるな。一旦夫婦と成つたれば世間を守るが男の役。通の侍を埋木となさん様もなし。命にかへて願うて見ん。地先づそれ迄は自らが部屋へ行きや。早う〜といふ折から。澤井

様御出と。知らせと共に打通れば。隔た柴垣お谷をば。ちらと見るより空響き。悔り驚く奥方も。お出とばかり詞なく。ッシ入らんとするを。ア、コレは。先生の御病氣毎日お見舞も得申さぬ。其御立腹があつての儀か。拙者とても病氣故。お斷の願ひを立て。御前勤めもとくより引いて罷有れば。御無沙汰の段は御免下され。何の親御又左衛門様から御懇な間柄。其御挨拶に及ばぬ事。成程々々其懇意について。いひぞはお尋ね申さうと存じたが。其許様は先生の後妻。先奥方の腹に出生の志津馬殿。今一人お谷殿と申す姉御が有つたが。何時頃からやらんと見掛け申さぬ。嫁入なされた沙汰もないが。やはりお屋敷にごさるか。地譚知りながら問ひかける。そこを心と奥方は何と返答口籠る。地一間の

内より立出づる和田行家。病氣ながらも鋭き眼中。阿よぞ〜澤井氏。心にかけられお見舞過分々々。イヤ先生存じたよりは顔色も宜しく。珍重に存じます。扱今日参つたは密々にお話し申したき事あつて。申し奥方。ソレ冷えるにお蒲團上げられいと。地いふを立端に柴垣は。阿腰元ども燭臺持つて。地來いよ。ッシ〜と立つて行く。地股五郎摺寄つて。阿お話と申すは別儀でござらぬ。兼て貴公の家と手前とは一家同然。殊に拙者劍術のお世話に預りし先生。心腹を打割つてお話し合ひ致す中。貴公様も御同然。そこを存じて。丙分にて申上げうと存じ参上致してござる。これは〜お互に御懇意に致すからは。何事によらず承りたい。サ、御遠慮なうお話しなされ。イヤ別儀でもござらぬが。正宗の刀私に御譲り下さるまいかなと。地思ひがけなき一言

に。返答なければ。詞サ、スう申し  
たばかりでは御合點參るまじ。斯うでござる。正宗の刀は質物しちぶつに入れてござる。

斯様申せば。志津馬殿の事訴人せじん致す様なれど。譯を申さぬと御合點が參るまじ。

恐うござる。吉原の潮川と申す遊女に迷ひ。正宗の刀を質に入れ身謂の相談極りしと承る。エ、とくにも拙者存じたならば。御意見でも仕らんと存じた所が

跡の祭。スリヤ正宗の刀は他家の物に成ります。そこを存じて拙者方へ申請くれば。貴公なり。手前なり。兩家に有るも同然。御内談とは此儀でござると。

お爲ごかしに言ひ廻す。心の内ぞ恐ろし。詞コレハ。日頃御懇意に致す間。悴めが不届御世話下さる段。コレ。手

を突いてお禮申す。千萬忝う存じます。扱々不届な悴め。ヤモ此お世話御無用になさつて下されソリヤなぞでござる。右

の刀は則ち私方へ請戻してござる。ムウスリヤ正宗の刀は請戻したとな。それは重疊。シテ志津馬殿はな。勘當致した。

若し斯様の儀沙汰あつて萬一殿様よりお尋ねに預りし時。申譯ないと存ずるから。右の刀を請戻し御沙汰なき中悴めは勘當致した。ハテ氣の毒千萬。時に外にお頼み申したいは。私未だ獨身でをります

が。どうぞ姉御のお谷殿を。拙者が妻に下さるまいか。スリヤ婿は子なり。行家殿の御家督拙者が預り。其内には志津馬殿。お心も定りなば御渡し申すに相違なし。是非お谷殿を申請けたい。此御相談

は如何でござるな。イヤ御親切切いが。其お谷めが事は唐木政右衛門と申す浪人と密通致し。家出したは四年以前。斯様の不届者なれば。勿論此奴は七生迄の勘當。貴公も此儀は申さいでも能く御存じ

でありながら。何かこりや御座興でござるのと。地何をいふても受付けぬ。始めの恥辱に股五郎。何がな見出し付込まんと。白眼廻せば立聞お谷。三人一度に見合す顔。立切る障子驚く行家。詞コリヤ。悪い。今爰へ出ると身が武士が立たぬ。屋敷に叶はぬ出てうせいと。

サ追出して置きましたと。地言紛らせは高笑ひ。ム、ハ、ハ、ハ、ハ、行家殿何いはつしやる。娘やることならぬならいやで済む事。ナニカコリヤ手前小身者と侮り嘲弄召さるの。ヤ恥辱を與へるのか。股五郎は武士でござるぞや。侍でござる。娘は勘當致した。屋敷に居る物を追出したの勘當のと。貴公殿の名代に一家

中を治むる役ではないか。サそれで御家老職といはれますか。志津馬を勘當したといふは偽り。これも屋敷に隠して置く。正宗の刀貴公が質に入れたであらうと。惡口雜言。放題。地こたへ兼

ねて膝立直し。何慮外なり股五郎。汝が親又左衛門は身ともより上座の家筋。其悴と思へばこそ。劍術の弟子ながら禮儀を以てあしらへば。のし上がる法外者。

心得ぬやつと思へども。何とぞして挽め直し。親の跡目を繼がせてやりたさ。劍の一手も教へてくれた。師の思ひを打忘れ。悴津津馬をそり上げて遊所へ連れ行き。正宗の刀を質に入れさせ奪取つて夫を越度に我が家を滅亡させんと。よくも巧んだ人非人め。こりや汝が智恵ばかりでない。正宗の刀に望をかけ。頼んだやつが有らうがな。其頼人も合點たり。サア眞直に白狀せ。鑢鑢が劍も持人による。性根腐つた股五郎。病勞れても汝らごときに。正宗を出すにも及ばず。身が差料の此刀。巧みの腸引出して洗うて見せうか。何とくと。地胸に覺えの一々を。見透されたる股五郎。頬眞赤にしよ

げ烏の。返す詞もなかりしが。地面目なげに顔を上げ。詞ハア左様ぢや誤つた。

相果てた親どもが義を思召され。折節の御意見が耳に當つた僻み根性。彌つたる色狂ひ。放埒の友を拵へうと。志津馬殿を廓の魔道へ引入れたは成程拙者。さう見顯はされてからは一言もござらぬ。好色に魂奪はれ。大恩の師匠を仇に存じた非義非道。只今夢の覺めたる心地。御推量の通り正宗の刀。拙者が持つて何に致さう。有様は色遣ひの金が欲しさ。そこへ付込み右の刀を奪取つてくれるならば。金子千兩禮物に遣さうと。頼んだ者も外ならず。拙者めが一家ながら思へば。こいつが悪智恵の根本。かう打明けて申上げるは今より心を改むる證據。ア、假にも悪い巧みは致さぬ事。もうくくくも悪い。懲りはしました。これ迄の不届。最前よりの無禮の段々。先生眞平御免下

されコレく。斯う申したばかりでは御得心あるまい。彼の正宗を望む者。拙者への頼みの書狀。御目にかけるが二心な

い股五郎が申譯と。地取出す一通手に渡し。懺悔に誠をあら涙誤り入つたる有様。地心に油断はなけれど。や、病中の老眼に燭臺引寄せ狀の宛名。澤井股五郎殿同城五郎。ム、さもあらんと長文を。地つぶく胸に疊越し。突出す白刃と右劍の抜打。眞甲へ切付くる。シヤ國賊めと付け入つて。澤井が肩先切付けた。此方もしれ者受流し。流石名を得し行家なれども。初太刀の手疵に眼くらみ。受太刀になつてたちくくく。引くよと見えしが飛違へ。澤井が肩間丁と切る。下より付け込むすくひ切。腕腹をかくて切込む太刀先。急所にや當りけんごつかと坐する縁の下。股の附根を貫く切先。立つも立たせずたみみかけ。非業の

劍に和田行家、無愆の最期ぞ是非もなき。地とゞめの刀引きぬいて。疊あぐれば奴の實内。詞澤井様お首尾は。シイ。主に見かへて身どもへ加勢。あつぱれ出かした褒美くれう。ア、忝しと立寄る實内袈裟にすつばと。フシ邊を見廻し。地豫て謀計の股五郎。上段の床の間の刀箱取出し。蓋押開けばこりやどうぢや。刀はなくて狀一通。こは心得ずと星明りに透し見て。詞ナニく正宗の刀一腰。仔細あつて私方へ預かり申す所實正也。和田行家殿。佐々木丹右衛門判。扱は刀は丹右衛門が預かり居るよな。エ、無益の骨折口惜しと。地手疵にしつかと鉢巻締め。表は人目飛石傳ひ。フシ裏道さして落ちて行く。地曲者が入つたるぞ燈を持ってと奥方の。聲に追々腰元ども。折から駈来る丹右衛門。伏したる死骸は。詞ヤアコリヤ行家様。先生を何者が手にか

しぞ。今曲者が此小柄コリヤ澤井股五郎。遠くは行くまい家來ども。表を圍へと高股立。地聞くと等しく家内の騒動上を下へと。へ立騒ぐ。地桐が谷の裏道づたひ御勅使見送り奉る。跡押へは澤井の一黨。其身は素袍懸烏帽子。皆一樣の御装束。東君臣の禮儀馴しがたく。星をあざむく高提燈。フシ事嚴重に見えにけり。備への中を股五郎。疵持つ足の裏道を。押分けて。フシ打通れば。地それと見るより野守之助。詞股五郎殿ではないか。心得ぬ面體氣遣はしと。地聲をかければ傍に寄り。詞豫て申し談ぜし通り今日行家が方へ参り。何かと事を謀りしに此方の底意を氣取し上。法外なる申分骨髄に徹したれど。強敵の行家なれば。計略をもつて只一討。併し残念なは正宗の刀。持歸らんと存じた所。丹右衛門が預り居る事。慥な證據はコレ此一札。ナニ城五郎

殿我これへ來りしは一人の母の事何卒御世話頼みたい爲ばかり。一家の誼お頼み申す。地一日にても生延びては行家一家の奴輩に。未練者と言はれんは。家名の恥辱一家の恥。詞我一人切腹致せば。跡の難儀は氣遣ひなし此世の名残おさらばと。地言捨てて駈出す城五郎聲かけ。イヤコレく先づ待たれよ股五郎。身不肖なれども澤井城五郎お隠匿ひ申したい。意氣地によつて討たれしは我々が頼みしより事起る。聞捨て致しては武士道の表が立たぬ。此上は我々が命にかけて隠匿はん。先祖の遺恨今此時。出かされたり股五郎。縦へ和田一家の奴輩。君命を以て來るとも何程の事あらん。一時も早く屋敷へ歸り評議を定めん。油断は不覺の基なり。路次の用心氣遣はし。氣を付けられよ近藤殿。詞其儀はちつとも氣遣ひなし。歸宅濟む迄御役目指でもさ



ば彼等が家の一大事と。地備へを亂さず振出す。威光輝く鎌倉山。連れて我が家へ三丘立歸る。

### 第三 圓覺寺の段

地されば澤井股五郎行家を討つて立退くより。直に駈込む圓覺寺。門戸を鎖して關近藤海田荒川澤井を始め。昵近の若殿ばら。若し上杉より寄せ來るとも引きはかへさじ弓鐵砲。佛の説きし法の庭平等大會に引換へて。修羅の街の大評定方丈狭しと詰めかけたり。地股五郎一禮し。同物數ならぬ陪臣の拙者。城五郎殿は一家の誼。其縁に連れ御歴々の昵近衆。御隠匿ひ下さる段。身に取つての面目此上なし。併しながら主人上杉憤り深く。拙者が母を人質に捕へ置き。股五郎を渡さずば。母を成敗するとの難題。我故に一人の母を殺すも不孝。且は誼もなき昵近

方。斯く騒動に及ぶも氣の毒。地やはり拙者を上杉へ。御渡しなされ下さるべしと邪智を。隠せしヲ賢人顔。地野守之助進み出で。何さ其遠慮には及ばぬ事。此度我々が加擔するは。お手前の爲ばかりでない。上杉には此方共年來の遺恨有り。武將の御先祖尊氏公より譜代相傳の昵近武士。元弘建武の古へ。尊氏公に粉骨を盡し。忠義を勵みし我々が家筋。上杉を始め其外の諸大名は。旗色のよきに從うて。降参した腰拔の家筋。我は顔に高祿を取り。昵近衆を蔑に輕しむる日頃の存外。事がなあれと思ふ折節。お手前をかくまうたは。上杉に恥を與へる爲さ。案の如く上杉此事を憤り。追付けこれへ押寄せんと。軍評定最中の由。今太平に治つて茶の湯遊興に日を送り。鍍兜の着様も知らぬ國大名。何程の事あらん。ヲ、サ野守殿の仰せの如く。

日頃斯様な事を待受け武藝鍛錬の我々一まくりに蹴散らして。昵近武士の遺恨をはらすは今此時。地敵方より寄せぬ先。此方から逆寄せにして上杉に泡吹せん。ヲ、尤もと立ち騒ぐ。地城五郎押止め。ア、暫く。某が所縁ある股五郎をお庇ひある何れもの御深切忝し。さりながら。行家を討つたる事の起りは。此城五郎が頼みし事。其仔細は。此度武將の公達。御任官の御祝儀に就き。諸大名より名劍を献ぜらる。然るに行家が家に持傳へし正宗の名作あり。主従の事なれば。上杉これを取つて献上すべし。さあれば彌。上杉が鼻高く。威をふるはん事心外至極。何とぞ此刀を奪取つて。某が手より献上すれば。我は勿論昵近衆の。手柄にも成ると存じ。股五郎に言合め。行家めをぶち殺したは。正宗の刀を取らう爲ばかり思ひの外。此刀行家めが手

にはなく。佐々木丹右衛門が預かりをる由。股五郎を請取りたくば。老母鳴海が命を助け。並びに正宗の刀を此方へ渡せよと。難題の使者を立てたれば。此返事のある迄は。暫くお控へあれよと。地言ふ間程なく馳來る門番の徒士の者。詞佐佐木丹右衛門より今朝の御返翰と。地差出す文箱を城五郎。封押切つて一通を。さらさらと讀み終り。ホ、ウ城五郎が思ふ壺。股五郎をお渡しあらば。母鳴海が擔を赦し。正宗の刀を遣はすべし。追付け二品とも丹右衛門持參致さんとの文。後刻御出を相待ち居ると。口上を以て返答せよと。地蓋引締むる明文箱。取るより早く走り行く。詞イヤサコレ城五郎殿。一旦かくまうた股五郎今更のめく〜と上杉へ渡し。それで武士が立ちますか。地ヲ、我々も其意得ぬ貴殿は上杉が恐ろしいか。臆病神が取憑いたか。卑

怯至極と、ッ詰めかくれば。股五郎押鎖め。ア、どなたにもお静まり下されい。イヤ城五郎殿。拙者が命は惜みはせねど。武士の意地を立てぬく貴殿が。今になつて腑甲斐なく。上杉へ渡さうとは。エ、聞えた。行家をぶち放したばかりで。お頼みの正宗手に入らぬ御立腹。それ故でござるな。イヤサ左様の事でない。今合戦に取結ぶとも。只世上を騒がすばかり。望の刀が手に入らねば。無益の沙汰。一旦和陸に事を納め。母の鳴海と正宗を請取つた上。お身に繩打つて心よく相渡し。使者の歸りを思ひがけなく。多勢をもつて引包み奪返す我が工夫。いづれも必ず隠密々々と。地聞いて皆々勇み立ち。誠に智謀勝れし貴殿。左様ならでは叶はぬ所。詞然らば各々其用意と。地騒ぐを押へてア、先づ待たれよ。謀は密なるを以てよしとすれば。某

が詞を出す迄いづれもお控へ下さるべし。股五郎が後の災免れさする屈竟の。忍び所は九州相良。密に落す用意萬端ナニ呉服屋十兵衛これへ參れ。地ハツト答へて次の間より。小腰屈めて並居中。怯めず憶せず畏り。詞又五郎様の御身の上。委細とつくと承りました。城五郎様へは。數年來御出入の私。相良へは商ひに毎年下る道案内。見込んで頼むと大切のお供。畏つたは商人冥加。多年の御恩報じなれば。ちつともお心置かれますな。町人でこそあれ心は金銭。二人や三人は苦には致さぬ。腕に請合けちりんも。地掛直は申さぬ呉服屋が。めつたに引けぬ太織地の勇一疋。フン頼もし〜。地股五郎片頬に笑ひ。扱々氣味のよい男。敵持の供すれば肌刀は放されず。行家めを仕留めた時コレ見よ。弓手に二箇所の疵忽ち治したる此藥は城五郎殿の家に傳は

る南蠻國傳來の妙藥。身ども同道の人  
人へは。いづれもこれを懐中さする。地  
お手前もまさかの用意。此印籠を預ける  
が。股五郎が一命を頼む印と手に渡せ  
ば。詞これはく結構なお藥でござりま  
す。怪我と病氣は何時知れず。地道中の肝  
心と、ッ取納めたる折こそあれ。地又も  
駈け來る遠見の者。詞上杉の使者佐々木  
丹右衛門。網乗物一挺供は僅か三人。只  
今門前迄。ヲ、よし。言付けし如く  
門を開き。随分神妙に取計らひ。此所へ  
使者を通せ。ソレ。地いづれもは裏門よ  
り。先へ廻つて待伏せの。用意々々に逸  
り男武士。我一急ぐ裏門口。股五郎は十  
兵衛を引連れ。奥へ入りける。地翠を  
弾じて敵を避け。窺窺として檻奔の謀  
もやあらんと心救さぬ丹右衛門。使者の  
禮儀の料も。四角四面の方丈へ。網乗  
物を昇入れさせ。ッシシづくと打通れ

ば。地城五郎威儀繕ひ。詞ホヲ聞及ぶ御  
邊は佐々木丹右衛門とな。今日の使者大  
儀々々。今朝も言送りし通り武士の意地  
によつて争論に及ぶと雖も。かく静謐に  
治まりし代に。私の遺恨にて合戦を取結  
ぶは武將への恐れあり。罪は罪なり股五  
郎。望みに任せ渡さんなれば。此方より  
も望みし如く。正宗の刀。並びに老母鳴  
海が事上杉殿より。定めて送られつらん  
ずな。ハア成程。主人上杉顯定怒り  
の元は股五郎一人。逆磔の刑に行ひ。  
國の政道を正すべき存念。股五郎たにお  
渡しあらば。外に曾て仔細なし。則ちこ  
れこそお望みの正宗。並びに老母を誘引  
せり。イザ御檢め下さるべしと。地箱に  
納めし持參の刀。ッ差出せば手に取上  
げ。地切先物打鐘元とつくと檢め鞘に納  
め。詞ヲ、聞きしに違はず天晴名作。  
儘に落手と。地提げて立上る丹右衛門引

止め。詞ア、魚忽なり城五郎殿。股五郎  
をこれへ出し。老母と互に取替へざる  
中。むさと刀はお渡し申さぬ。サア下手  
人股五郎に纏打つてお出しなされ。ア、  
近頃我儘千萬と。地眼を配る勇氣の面  
色。詞ヲ、實に尤もこれは身どもが鹿  
相。然らば刀は暫くそれに追付け下手人  
渡し申さうが。先づ其方の囚人老母鳴海  
が變らぬ體。ヲ、母に科なければ最早繩  
目にも及ばずと。地乗物の網取拂ひ。引  
出す姿縛り繩。子故に科を身に老のッ  
恥と。鳴海が憂き思ひ是非も細目をほど  
き捨て。丹右衛門老母に向ひ。詞子息股  
五郎を此所に請取る上は。其許が命を  
助け城五郎殿へ渡すべき旨。今朝殿より  
仰の通り彌承知るべしと。地聞いて  
鳴海は顔を上げ。誠に忤が不所存故。  
彼方此方へ御苦勞かけ。憎い奴とは思へ  
ども。地天地の間に親一人。子一人の股

五郎。未練とも卑怯とも笑ふ人は笑ひもせよ。どうぞ助けてやりたいと。思ふが親の身の因果。御主人へ對しては不忠者の悴なれども。母が命を助けう爲。細かゝつて出ようといふは。此親には孝行者。地老い年寄つた此母が詮ない命生延びて。我が子が刑罰に行はれるを。眺めて何の嬉しかるお情却て恨めしい。同ヤイ股五郎此母は何の様な憂目に逢はうが殺されうがちつとも構はぬ厭ひはせぬ。必ず爰へ出てくれるなよ地ならう事なら此婆を。代りに殺して股五郎が。命お助け下さりませ。悪人でも産んだ子に違ひがなければいぢらしい。お慈悲〜と恩愛の子故に迷ふ憂涙とどめヲシ兼ねて見えけるが地ア、思へば誰にも恨みなし。同此科の起りといふはよしなない刀に念をかけ地成敗に逢ふも名作の劍は我が子の敵ぞと言ひつゝ道ひ寄

り棒鞘をすばと抜く手も見せばこそ呪のくさりをかき切つたり。これはとかけ寄る城五郎。佐々木も仰天乗物へ。手負を打込みしつかと押へ。城五郎に目を放さず底意を探る礎繩。又もヲシ大事と見えにけり。地澤井わざと空とぼけ。同コレサ丹右衛門。契約の通り鳴海を受取り申さうかいいかにも科人股五郎を受取る代り。母が命は助くべしと契約は申したれど。御覽の通り只今老母は自害致した。併し此方の手で殺しはせず我とわが手に相果てたは某が存せぬ所。黙れ丹右衛門。隠匿うた股五郎を了簡して渡すは何故老母を受取らう爲ばかり。親の命を子に換ゆる大切の鳴海なぞ殺した。元の如く生かして渡せさなくば澤井股五郎もいつかな〜渡しはせぬ。サア老母を早く請取らうサア何と〜と詰かくる。丹右衛門ちつとも騒がず。鳴海が自害はいう

て返らず。弟子として師匠を殺す極悪人の股五郎。目の前で親が死んだればとて悲しむ様な奴でなし。況して縁者の城五郎殿。鳴海が最期をそれ程に惜まつしやる様がない誠は老母が事は附たり。正宗の刀がお望で。ござらうがの。それとも刀は入らぬ。老母を生けて返せとあらば。拙者とても詮方なし約束變改元の白地罷り歸つて此趣主人上杉に言上し。一家中これへ押寄せ鐘先を以て股五郎を生擒にする分の事。人非人の澤井が母。死神の憑いたはこれ天罰。地軍の血祭早やくたばれと。手負の刀ぐつと引抜き。正宗の刀の切味お望みならば御相伴なされよと寄らば斬らんす氣相に。肝先挫がれ城五郎。同ア、これさ〜。丹右衛門此方より事は好まぬ。ム、いか様よく思へば自身覺悟の鳴海が最期全くお身か業でなない。刀さへ渡し召さるれば言出した武士

の意地さつぱりと立つといふもの。ム、スリヤ股五郎をお渡しあるか。渡さいで何とせう元來彼も覺悟の上ヤア、股五郎最期の時刻近付いたり尋常にこれへ出やれ。地ハア疾より仕度仕ると。返答立派騒がぬ澤井。海田荒川前後を圍ひ。其身は丸腰惡びれず。悠々と座に直り。圓なにお使者御大儀。傍輩を討つた意趣の元は外でない。老蓮の和田行家。年に免じて立ててやれば付け上り。此股五郎を劍術の弟子などと師匠顔が胸惡さ。何の苦もなく討放した。御身達に安々と擲め捕らるゝ股五郎ではなけれども。身ども故に一國の騒ぎとなるが氣の毒さに。命惜まぬ武士の覺悟。城五郎殿イザ御政法に行はれよとむす。座を組み手を廻す。アア、あつぱれ。其方が命一つで。騒動納まる國家の爲。恨みと思ふな股五郎と。捕繩たぐつて縛は縁につなが

る城五郎。身どもが潔白見届けたか丹右衛門。ハアこれで主人が心も満足。扱此老母の死骸を進上申さうか。イヤサ死人は入らぬ持つて往にやれ。然らば科人。其刀。只今取換へ。請取りませう。地いざと縛付棒鞘を。渡す目配り請取る氣配り互に。屹度ッ立別ね。圓これで双方意恨もさつぱり。老母が死骸は乗物に此儘屋敷へ早や急げ。おさらばさらばと目禮も。龍の鬚を出でて行く危かりけるへ次第なり。影ほの暗き。黄昏時縛付引立て丹右衛門。前後をッ固めて行過ぐる。地思ひがけなき山門より。ばつしと射かくる白羽の矢。膝にかつきとコハ如何にと。引抜く間も又一筋弓手の腕に立騒ぎ。周章驚く同勢が中へむらむら物陰より。現はれ出でたる數多の武士。物をもいはず拔連れて。家來を胴切車切斬伏せ。一文字に。切つてかゝる

を丹右衛門前後左右に渡り合ふ。其間に澤井を引包み何國ともなく奪ひ行く。南無三寶と駈け行くを。新手を入れ替へたみかけ。既に危き其所へ。心ならずもかけける志津馬。スハ一大事と拔刀。命限り根限り火花を。散らす。三、三、強勢勇氣相手は大勢身は二人。金鐵ならねば丹右衛門。數箇所の手疵刀を杖。圓志津馬殿かエ、口惜しや股五郎を奪取られた。地無念々々とばかりかつぱと伏す。ハアはつと志津馬もどうど坐し。弱るを付け入る家來ども。後れ馳に池添孫八片端撫切り。ばつ散し。志津馬を圍ふ忠義の働き。お谷も斯くと氣もそどる足も、ッしどろに走り着き。圓ヤア志津馬は手を負やつたか。若旦那手は淺いぞ。コレ氣を儲に地と抱起せば。圓イヤ手疵には痛まねど。これが正氣を失なはずに居られうか。股五郎は手に入らず。正宗の刀

は敵へ渡す。頼みに思ふ佐々木殿は此深手。いよ／＼殿への言譯なし。運命もこれ限りと。地刀逆手に取直す。ア、コレ待った。其方が今死んで父様の敵は誰が討つ。サア其敵が討たれぬ故此切腹。

イヤ／＼／＼何ぼうでも放しはせじと。地争ふ二人。倒れ伏したる丹右衛門。むつくと起きて。イヤレ志津馬早まるな。股

五郎を奪取られたは最初より覺悟の前。正宗の刀は我が手にある。ム、すりや最前城五郎に渡されしは。ヲ、サアレハ贋物。行家殿より預かりし。正眞の刀はいつかな渡さぬ。誠の正宗。志津馬が手より。

主人上杉に差上げ上杉公より。武將へ献上ある時はお家の譽。是を功に敵討の。願ひを立てさす我が工夫。とは思へども城五郎は。音に聞えし刀の目利。贋物を突付けては受取らぬ邪智佞人。先づ正眞を檢めさせ。直ぐ様取つて鳴海が自害。

乗物の中の疵口で摺替へた贋正宗。これにと乗物より取出す切柄正銘の。極めは爰に今際の鳴海。早や絶え／＼のフシ息の下。股五郎が親の身で丹右衛門様と言合せ。城五郎を謀りしはどうで非道な悴めが命は所詮叶はねども。殿様のお手に渡れば。竹無か礮付の御成敗は知れた事。地せめて武士らしう志津馬殿と。敵討の勝負で死すれば何ぼう嬉しい

と。此場を見通し下されとお頼み申して今日の時宜。ヲ、サ老母の頼みはな

くとも。志津馬に討たさにやならぬ敵。わざと敵へ奪取らせ。丹右衛門一人が過りに成つて相果つれば。地月日を待つて本望遂げ。敵の首を先生の。位牌の前と身が墓へも手向けてくりやれ頼むぞと。

最期の際迄師弟の義理。我故命を捨てらるゝ此大恩は何時の世に。返す／＼も残念は。大敵の股五郎。志津馬が助太刀

後楯と。地頼む此方に今別るゝ。心の悲しき推量あれ。イヤア腑甲斐ない志津馬殿。丹右衛門は死するとも無念の魂。此世を去らず。郡山の政右衛門こそ我に十倍勝りし達人。早や／＼歸つてお谷殿。助太刀頼むといはずとも彼が爲にも男の敵。違背はあらじ早やさらば。地此世のさらば未來の門出。丹右衛門様。鳴海殿。地思へば今日の言合せ。敵と敵が修羅の道連。とどめは五に一太刀と。落ちたる

刀指添を。よろめきながら取上げて。眼は眩めど胸と胸差貫いたる。義士貞女。歎き志津馬も深手の弱り。家來が肩に敵の圍み。齒をくひしばつて立歸る心の。内こそ三度へつなけれ

第四 郡山宮居の段

君萬歳の祈とて。神に歩みを運ぶなり

ハタシ國の初めの其昔。誰が名付

八雙中道越賀伊

けてや郡山。御城下の見付筋武家町人の別ちなく。引きもちぎらぬ弓八幡。奉納願主齋田大内記殿。謡の番組数々も。打納まりし隅田川。あらお目出たやと上を見習ふ下懸。やがてお立を、フシ松蔭に列を。正して待ち居たる。地 奎助が聲高に何と能助どう思ふ。同じ様に言ふは勿體ない事だが。殿様は遊藝がお好き故。今日は何處の奉納明日は爰ぢやのと。毎日のお能。我々も其お家に奉公して居ながら。其氣のないは冥加ない事ではないかと。地 いへば能助打笑ひ。同 ハハハ、何を奎助がいふやら。そりや汝が藝氣が無いによつてさう思ふ。おらが親はきつい能が名人。名さへ軍陀羅夜又右衛門というて。道明寺の祈りの段。面白い事だ。コリヤ、能助。道明寺とはそりや干飯ぢやないか。必ず外でそんな事をいふなよ。ハアアノ謡の名はヲ、何

とやら。ヲ、思ひ出した宗善寺。コリヤをかしい宗善寺とは津の國にある寺だわい。そんなら汝がのも違つた。道明寺は河内でないか。イヤ、宗善寺に違ひはない。ハテ片意地なもの。コリヤ能助お身は藝者の子なら狂言の心がある。何と稽古してくれまいか狂言覚えて何にする。ハテ殿様がお好だ故。毎日々々此通り。いかに下々ぢやというて。其氣の無いは何と不忠ではあるまいか。コリヤ尤もぢや。稽古してやる第一足取を稽古せい。サアおらが歩くやうにせいと。地 鳥居の馬場を能舞臺。仔細らしげに身繕ひ。同 マ、それ、手を振る事はない。兩手をかうして。さうだ、歩き様を覺えたか。ヲ、合點ぢや。ハテ垢切を切らした時の歩き様と覺えて居よ。おらがいふ様に跡から言へよ。かやうに候者は此邊りに住居致す者でござる。頼う

だお方が狂言を好ませらるゝ故。我々も稽古致さうと存ずる。太郎冠者有るか。ナイエ、悪い覚え。イヤ、此返事にしてくれい奴を呼出すのは極つて有るわい。身が前へ出あがらう。サアそれは芝居の臺詞だわい。ハアお前にはぬるくて悪い。エ、そんなら止しにせろと。地 仇口々を言ひ廻す。お立と觸るゝ聲々に。恠り驚きしり、フシ舞ひ、かがみ控へ居る。地 威光輝く大内記殿。奉納首尾能く納りて早や御下向の先拂ひお徒士御近習前後を配り鳥居前迄出給へば。御供には宇佐美五右衛門中扨從に召連れられ。御前間近く引添へば。跡押へは櫻田林左衛門指南の棒を振廻し鼻高々と御供す。暫く是にて御眺めと宇佐美が詞に近習の武士。御腰掛を奉れば地 遙か跡より能太夫源之進。御傍近く手をつかへ。同 今日殿様のお能。恐れながら驚

き奉ります。いつ／＼よりも出来させ給ひ。神も納受ましまさん扱一家中。何方様もきついお上手。殿様の御機嫌の程御伺ひ奉ると地申上ぐれば打笑ひ給ひ。調ナニ源之進。これといふも其方が指南の徳と宣へば。ハアコハ冥加ない御詞。地時の面目有難しと、フシ退去して一禮述べれば。地重ねて仰出さるゝは。調ア、羨しいは源之進が身の上。我が望みは外になし。能太夫になつて。狸々の亂れ一世一代がして見たいわい取分け今日の奉納も。我一人の力にあらず。一家中の者迄も満足せねば奉納とは言ひがたし。殊に天氣も宜しければ我が悦び限りなし。地大儀々々とありければ。皆一統に頭をさげ。ハットフシばかりに平伏す。地五右衛門御前に手をつかへ。調誠に殿様の御意の通り。今日は一人天氣宜しく御祈願の奉納一家中の者は申上ぐるに及ばず。

我々迄も恐悦至極に存じ奉る。恐れながら五右衛門が御願ひの筋あり。先達で御取次仕る唐木政右衛門儀。劍術を申立てお家へ御奉公に出し候所名のみばかりにてその器量あるなきを。御上覽に入れ奉らす何卒林左衛門殿と立合の儀。御高免遊ばされ候様に御願ひ上奉ると。地聞きも敢へず林左衛門。調ア、これ／＼／＼宇佐美殿。御上へ對し恐れ多い願ひ尤も政右衛門とやら貴殿の御世話によつて。劍術を申立て御奉公に出られた人。武士は相互。成程お望みならば相手になつて進ぜうが。そりやもう蟻螂が斧とやら申す事さ。いかぬ事ぢや／＼。止しに召されお氣にはさへられな。此林左衛門相手には餘り大人氣なく。何の夫が一堪もあるものか。殿にもをかしく思召し。ハハ、ハ、と、フシ嘲笑ふ。地林左衛門には見向きもせず。右政右衛門儀不鍛錬なる

者などと。陰口を申す者も候由。左様な者に御知行を賜はり候ては取次仕る此五右衛門。一家中へ相濟み申さず。是によつて政右衛門に立合の儀御願ひ申上候様と申聞かせども。彼も新参者の儀故辭退仕る。何卒。此儀御上より仰付けられ下さらば拙者が面目此上なしと。地餘儀なき願ひに内記殿。調武の道は尤もなれども。我我家に生れながら劍術の事は。とんと氣が乗らぬぢや。政右衛門事は家老どもがきつい取持。兩人の立合何方が劍術善惡にもせよ。某が構はぬ事。家老どもが得心せば。身が事は何時でも見物せん今日の奉納もとかく家老ども不得心。そちは又未明より出でて忠勤盡す其代り。餘り好かぬ事ながら始めての願ひ。聞届けんも道ならず。政右衛門事は辭退致すとな。兩人の事は用人方へ言付けてくれう其代り近日若宮の八幡宮へ春日



龍神奉納したい。又家老どもが何といはうと。其方が計らひせよ。ヤモとかく遊藝が楽しみが深い。願ひの通り聞届けたと。地御上意の。詞にハット宇佐美が面目。忝派に、フシ平伏せば。地大内記取仰せには。回奉納の場所へ諸人の入込み。神拜の恐れもあれば。其方は跡に残り御神樂をあげ。社内の清め仕れと。地言ひ捨て御座を立ち給へば。横に莖る櫻田が御跡に引添へば。さゝめき渡る御供先駒の嘶き響の音。フシ本城さして歸る。地御跡見送り五右衛門は獨語。詞ハア流石大家の殿様。これ程にお好みなさるゝお能に代へ。林左衛門と政右衛門立合の勝負。御願ひ申したれば。早速に御聞届け下さるゝも。日頃の願ひ本望と。地社内をさして、フシ行く折から。地申しくと松蔭より。呼びかけるは女の聲。何者なると見合す顔。詞お谷殿で

はないか面體荒れし人相氣遣はしやと尋ぬれば。地お谷は涙押し拭ひ。包むとすれど女の事。有様にお話し申さん。回國許から歸りてより政右衛門殿の心底變り。出るにも入るにも不機嫌、此刀を差出しこれを持つて五右衛門方へ行けというたばかりに物をも言はず。地どういふ譯やら合點行かず。問返されぬ日頃の氣質。回御前に逢うて様子もいはうと。其儘立つて來りしが。地通りかゝりてお前を見受け殿様のお立をば。忍んで今迄相待ちしと。刀取出し差俯向き。フシ暫く詞もなかりける。地宇佐美はつくづく打眺め。回ハテ心得ぬヲ、それよく。コリヤコレ我が秘藏せし長船の一腰。其方が親代となつたる證に遣はせしに。持たせ越したは合點行かずと。地引抜き見れば物打に。差添へし一通。コハくいかにと解ほどき。見るより悔り。回ム、コリ

ヤ此方へ暇の一札。様子があらう語られよと。地詞にお谷は仰天し。回なに私への去状とや。去らるゝ覺え微塵もなし。エ、聞えぬぞや政右衛門殿。地科もない身をむごたらしう。去るといふこと誰が始めた。お腹に十月たどもない身を。情なやと。エエチかつばと伏して。泣居たる。地五右衛門せき立ち。回エ、こなたも武士の娘でないか。魂の腐つた政右衛門。跡を慕ふ事はない。エ、口惜しい。我が眼の見えぬが誤り。天晴器量のある奴。何とぞ出世をさせんと思ひ。今出頭顔する林左衛門と一勝負立合はさせ。武藝の器量をあらはし。一家中の手本とせんさすれば。殿にも遊藝の事はお控へなされ。武道の道にお心をよせ給はゞお家のお爲と思ひし故。林左衛門と立合をすゝむれども。辭退するは。臆病風に引かされた大腰拔めが。此儘に相止めになり

りし時は一家中の物笑ひ。顔を上げし御前の手前も言譯なし。地エ、臍甲斐なやとばかりにて、スエテどうど。座を組み居たりける。地お谷も共に泣きくどき。夫の心の直る様。卑怯者といはれぬ様に。

コレ思案を頼む互右衛門様と。取付き歎けば。詞ヲ、さう思ふも尤も。最前も殿の御前で。林左衛門めが我に向ひ。彼等を相手に立合ふは大人氣なしと。人もなげなる雜言過言聞かぬ顔は何ゆゑぞ。お家のお爲二つには已を出世せんものと思ひし事も恩を仇。但し國許の騒動を聞き一家の縁を切る所存か。おのれ故には勘當請けし此お谷。某が親となり女房に持たせしに。科なき者に疵を付け。追出しておこすのみか。親代りにやつたる此刀の物打に暇の状を巻付けしは。我を欺く憎くい奴心肝に徹へくくこたへて了簡ならず。地年寄つたれどもこの宇佐

美。鋭き刃金の切味見せんと一圖に凝つたるヲ國侍。地お谷は取付きマア〜お待ち下されと。縋るを拂ひ。詞ヤア愚か〜一先づ此方は。屋敷へ歸り何氣もなくもてなされよ。我も跡より押しかけて。事によらば先手を取つて切りかけん。地其時こなたも此刀で尋常に自害せられよ。未練に心残されなと、詞立派に言放す。地夫の心の善惡をと。小袂讓々しく帯引締め。勇まぬ心取直し勇み。勇むや庭神樂打連れてこそ三更立歸る。

### 第五 郡山屋敷の段

地昔は山の跡なれや。今も名のみは郡山。家中屋敷も繕はず直な唐木の柱目ある。スエテ家の柱は退去に。地奥様役の留守預り石留武介は忠義者。常の奉公裏表。内證賄ひ、シ忙しき。地臺所より腰

元どもばら〜と立出で。詞コレ武介殿。今夜は内方へ嫁御様が見えるげな。お目出たい祝言振舞。わたしらもあやかる様にお手傳に参りました。イヤ御苦勞々々。小身の旦那政右衛門様。中間一人下女一人。若黨の此武介が。料理人やら家老やら。人手が無さに御家中の女中方を御無心。待女郎にも酌人にも各を頼みませ。イエ同じお給仕でも。祝言と聞けば氣がしよぎ〜。したが合點の行かぬ事は。お谷様といふ奥様。お里歸りなされてから。聞けば去られなさつたげな。まだぬくもりも冷めぬ中新らし女房を入るとは。餘りな手廻し。サイノ今度の奥様は何處からお出なさるのちや。イヤ我等もかつつ存せぬ。何だか知らぬが旦那が一人吞込んで。今夜嫁を呼ぶ程に。祝言の拵へいと言付けて出られたから。何が俄に料理拵へ。少しばかり聞き

はつつかた。海老の舟盛置鯉。置鳥などといふ。しむつかしい事は取置き。鮪の吸物腹合せは新枕の心ぢやげな。肝心の鳥喜を忘れて。正月のお古を組みかへて聞に合はず。いかぬ物は銚子加への折形。知つてなら折つて貰ひ度い。ハテ何の其様に儀式せいでも大事な。仲人さへない嫁入。今迄何處ぞにこつそりと。困うてあつた女中である。ホンニあの政右衛門様もお顔に似合ぬ色事師。先の奥様はお腹が立たう。馴染の女房暇取らして。跡へ来る嫁づらは。どんなお頬ぢや見てやりたいと。地さがない女子の口々に。うたて浮名の高話。憂事の思ひの。マシ種を身に持つて我が内ながら心置く。夫ヲ、奥様ようお出なされました。いふに武介も押下り。御幸ひ只今旦那のお留守。お歸りならばお知らせ申さう。地先

づお緩りとあしらふ程。いと重なる憂さ辛さ。諸白髪迄と言交した人の心も變れば變る。御我が内へよう来たといはれる様になつたわいの。身に覚えはなけれども。親分の五右衛門様。どの様な誤りしたぞ暇の印の此一腰。譯が立たねば受取らぬと。地お屋敷にも置かれねば立寄る方もない身の上。御見ればいかう賑やかなが。お振舞でもあるのかと。地問はれてそれとは言ひかぬる。跡先見ずの下女婢。御今夜はお屋敷へ嫁御がお入りなされます。ヤア嫁とは誰が嫁。コレ武介。よもやさうではあるまいと。思へど若し旦那様に。女房が来るのぢやないかや。イヤ其儀は。エ、武介殿隠してもどらうで知れる事。政右衛門様のお内儀様でござります。下地から譯のある事かして。今夜俄の御祝言。わたしらも隣屋敷からお給仕に雇はれました。お前様は先

の奥様でつきりとお妾に。見かへられなされたに違ひはない。地ぐつとお憎氣なされませと身にもかゝらぬ下々の。法界憎氣に焚付けられ。いと重なる口惜しさ。マシ包みかぬれば見て取る武介。御エ、コレ女中方。役に立たぬ事言はずと。お臺所に人がない。爐の炭もついで貰はう。アイ／＼合點ぢやサア皆お出で。地旦那のお歸り待女郎。こちらも嫁御の相伴で。よい夢見ようと打ちつれて立つて行く間を待兼ねてかつばと伏して。ステ泣居たる。御ヲ、お道理ぢやえ。アノ言やる事わいの。憎氣とは一通りの事。非業の死をなされた父様。弟志津馬が敵討の。力と頼むはたつた一人。其夫政右衛門殿。縁切れたれば誰を頼みに。大敵の股五郎。いつ本望が遂げられ。地力も綱も切果てしと。思へば胸が

張裂けると。歎けば共に泣いじやくり。  
「お氣遣ひなさるゝな。縦へ旦那がどう  
おつしやつても。拙者めが命に代へても  
此御縁は切らさせぬ。愜氣なされなと  
はその事。お前様のお腹には。政右衛  
門様の御世繼がござりますぞえ。去狀取  
らうが後妻が道入らうが其お子さへ御平  
産なされたれば。切つても切れぬ血筋の  
縁。政右衛門様の奥様といふは。お腹が  
證據のお谷様。敵討の助太刀も。頼みの  
種の人參子。産月に氣をもんで過ちあれ  
ば如何なさるゝ。追付け旦那お歸りあれ  
ば。愜氣がましい顔なされず。兎角此内  
を動かぬ様になされませ。御合點が参り  
ましたか。とはいへ義理のある女房去つ  
て。嫁入の祝言のとは旦那はどうしたお  
心ぢや。拙者も一切合點が行かぬ。ホン  
ニ此蝶花形私は折様存せぬ。お前様お頼  
み申しますと。地いはれて手には取りな

がら。みすく夫を腰取らるゝあた憎て  
らしい蝶花形。大骨折つて隼の鷹の  
餌になる春の雉子外に夫の聲聞え。阿  
レ旦那のお歸り。暫く忍んで地ござりま  
せと家來が情を力草。逢ひたい夫に隠る  
るも。疵持つ心唐紙をオケリ押明けへ忍び  
入りにけり。地心がけある侍は。地を這  
ふ虫も氣を赦さぬ唐木政右衛門。伊達を  
好まぬ刀の柄前。人に勝れし袴の幅上屋  
敷より歸り足。地武介手を突き。阿申し旦那。殊の外お隙入り。御用の品は如何體の  
儀でござりましたな。サレバ。此間  
から辭退する彼の。林左衛門と武藝の試  
み。明朝正六つ時御前において立合へと  
押付けて御家老の言渡し。今晚妻を迎へ  
まする婚禮の中。一兩日お延下されと願  
うてもいかな聞き入れず。女房呼ぶは私  
事。明日は延ばされぬ。とさりととは心な  
い家老殿。此方は内へ氣が急く。もゝ尻

になつて漸う只今。祝言の拵へ用意は出  
來たか。ヤレく知行取りにも飽果て  
た。地嫁の來る迄袷脱いで休息せう。  
枕おこせ女子ども。アイと返事もさし足  
に。地角を隠せし塗枕。そつとかたへに  
奥様を。腰元がはりの。見えがくれ袴は  
解けど胸解けぬ鋭い常の侍肩衣。折つ  
てたゝんで。取直す。詫の種とは見付け  
た夫。阿ヤイ武介。あの女子は何者ぢや  
やい。エイく。イヤ。あれは彼の。今  
日お目見えに参つた。新參の女中。ナ。  
ハイ。地旦那様お目かけられて下さりま  
せ。阿フウ奉公人ぢやな。見かけから愚  
鈍さうな。不束な女なれど。使うて見て  
くれう。コリヤヤイ。今夜は身どもが女  
房を呼迎へる。祝言の給仕申し付くる。  
アノ。嫁御とお盆の。其お給仕をせいと  
は。地そりや餘りイエサア。餘り。急な  
御祝言。不調法な私が。阿給仕得せずば

奉公叶はぬ。立つて歸れ。イヤ／＼申し  
地何でも御意は背きませぬと。下女にな  
つても夫の内。離れ兼ねたる。ステテ心根  
を察して武介が吞込む涙。同さうだ／＼。  
奉公は辛抱が大事。何おつしやらうと。  
アイ／＼とそこらを程よう。鹽梅加減。  
ドレお盃の用意せうと。地料理を。フシ  
機會に立つて行く。地折から宇佐美五行  
衛門様御出でと案内す。同ヘア又堅蔵が  
わせられた。誰ぞ。地羽織持て来いと言  
はぬ先から心得て。勝手覚えし女房の  
徳。機轉利して後から着せる羽織をひつ  
しよなく。同エ、子供ではないわい。差  
出た女め彼方へ行けと。地睨付られて。  
是非なくも。立間せはしく入来る五右衛  
門。彌左衛門裁の袴こはばり切つてむ  
ずと坐し。同政右衛門殿。今晚は其許に  
嫁入が有ると承り。御祝儀申しに參つ  
た。老人の寸志ぞと御覽下されと一通を

差置けば。これは／＼。婚禮を祝して  
の。御發句でかな。先づ以て忝しと。地  
押掻き見て驚き顔。同フウこりや拙者へ  
の果し状でござるな。ハテ存じ寄らぬ。  
先づ其意趣の次第はな。知れた事。科な  
い女房何故去つた。ヘア。拙者が女房  
を。拙者が去るに。お手前様が何故の御  
立腹。イヤさいふまい。尤もおお谷は上杉  
の家中和田行家が娘なれど。お身と密通  
して二人運。此郡山へかけ込んだ。浪々  
の體不便に思ひ。且はお手前が器量を見  
込み。殿へ申して有付かせたは此五右衛  
門。其上勘當受けて親の無いお谷。身ど  
もが娘分にして。改めてお身にくれたれ  
ば。以前は行家が娘にもせよ今は身が  
娘。少しの見落し有るとも。去られる  
義理ではないぞよ。一旦の恩を忘れ。外  
の女房持替へて。五右衛門を踏付けた仕  
方堪忍ならぬ。それとも。お谷に據らない

科でもあるかそれ聞かろ。返答次第。座  
は立たせぬと鐙打叩いて。フシ詰めかけ  
たり。同イヤモウ重々御尤も千萬。お谷に  
微塵も科はなし。去つた仔細は別儀では  
ない。飽きました。女房といふ物は。飽  
いてからはもう／＼。片時も持つて居ら  
れるものではござらぬ。サ、ハ、ハ、お聞  
きなされ／＼。御立腹は御尤もぢやが。  
今拙者と討果されては五右衛門殿。殿へ  
の不忠になりませう。なぜとおつしや  
れ。今日上より御意有つて。明朝御前に  
おいて。櫻田林左衛門と劍術の。勝負を  
致す此政右衛門。これまで拙者を推擧な  
され。明日も勝負見分の役目を。仰せ付  
けらるゝ其許が。此立合も致さぬ中に。  
拙者をさつふりと切つてお仕舞ひなされ  
て。殿へは何と。言譯はなさるゝぞ。是  
非憤り晴れぬとあらば。何と致さう。武  
士の因果。明日の御前を勤めて。その跡で

お手に懸りませう。暫く有免下されと。

地理に詰められてさしもの五右衛門。コ  
リヤ尤も。詞遣恨は遣恨。御用は御用。

明日迄は傍輩の役目。中よし。く。御  
得心下さるか。ア、忝い。地然らば

今宵はこれに緩りと。御酒一獻御上り下  
され。詞追付け新しい女房が参る。イヤ

又其器量のよさ。雪と墨との替徳古女房  
のお谷めは。不器量の上に。因果と早う

子を孕んで。地正眞の河豚の横飛。飽い  
たを無理とは思召すなど。愛想づかしを

立聞きの障子に齒形も入るばかりスエテ上  
る。瘡を折しもあれ。御御嫁様早やこれ

へ。ヲ、待兼ねた早う通せ。女子どもそ  
れ燭臺に火を點せ。地島臺銚子と騒ぐ程。

五右衛門が。フシひかつき顔。地玄關より  
奥座敷オクリ直に。手繰の紙乗物對の簞笥

に染込みの。襦も受持つ。介添女房。同  
ヲ、大儀々々。イヤ申し字佐美公。只今か

の妻が参つた。お悦び下され。ア、御目

出たい儀でござる。御推量下され。貴公  
には御退屈。コリヤく彼方に御酒上げ

いよ。イヤ拙者御酒たべると。胸が悪く  
ござる。是は氣の毒。然らばお菓子。イ

ヤサお構ひ御無用。ハテ堅くろしい地何  
がな御馳走。同ヤイコリヤ新参の女。何

をうろくまひくと。其不調法では祝  
言の酌は得せまい。お客人の癩癩。ソレ

お背中でも揉んであげいと。地いふ程腹  
の。立波に音を鳴く千鳥。四海波。同扱

我等今晚の花掣。袴を着る筈なれど。あ  
たまから打解ける様に。角菱止めて此儘

の見参。サアく。早う女どもの顔が見  
たい。ヲ、お心安い地掣様で。嫁御

様のお仕合。恥かしがつてござらずと。  
サアお出なされませと。乗物明くれば綿

帽子に。腰より上は埋もれて。七つばか  
りのいと様御寮。尺にも合はぬ襦ほら

く。帯につられて座敷にとんと。同乳

母これ取つてく。ア、其帽子。御盃の  
濟むまで召してござれ。ア、イヤく鬱

陶しからう取つてやりや。ドレ戀女房の  
地御面相と帽子取らせば尺長も縮らぬ嬰

粟の花嫁御。直す三寶土器を乳母が持添  
へ載かせ。掣君様へフシ上げます。同忝

い。女子ども皆見てくれ。何とちよ  
つこりと。何處に置いても邪魔にならぬ

よい女房であらうがな。ハア嬉しいく  
地目出たう一つ。フシ次の間より。ウタヒ

千秋萬歳の。千箱の地玉と譚壁。フシ打  
掛の。袖に通取乗せ。立出づるヤア。

同お前は母様柴垣様と。地驚くお谷に目  
もやらす。政右衛門に打向ひ。頑はない

此娘を女房に持つて下され。此上の本望  
なし掣引出の此目錄は。同主人上杉宇内

様より。悴志津馬に下されし。敵討御免  
の御書。いよく助太刀なされて下さる

お心ぢやな。お尋ねに及ばず。承知致いて。フシ罷有る。同コリヤ新参の女もよく聞け。身どもには先妻があつたれどもな。親の許さぬ密通。行家殿の勘當の娘。どれ合女夫の悲しさは、表立つて。掣男といふ事はならぬぞよ。今郡山の扶持を戴く政右衛門が。地よしみもない他人の。助太刀がなるべきか。同コレ此お後は世間晴れた行家殿の忘形身。志津馬が妹に違ひない。此子と今祝言すれば。これこそ誠の掣男。地男の敵。小男の助太刀仕ると。殿へ御願ひ申さんに。よも不届とは思されまじ。彼方此方を思ひ量つて。科もない女房。去つた謂は此通り。義理といふ色に迷うて。五年の馴染に。見替へた心波分けて五右衛門殿。御立腹の段々は。詞眞平々々。御免下され。我等もう酔ひました。何申すやらたわい／＼と。地酒に紛ぎらす本性の。言譯聞

いて手を合せ。よう去つて下さんした。其誠をちつとの間も恨んだ女子の廻り氣を堪忍して下さいせ。詞ヲ、サ。身どももよい年をして。疑ひの悪口面目ない。天晴武士かな。地政右衛門殿。同此祝言は敵討の門出。武士道も立ち家も立つ。よい嫁を迎へられた扱々々めでたい婚禮。地我等もとも／＼お取持と。始めの腹立打つてかへハズミ一度に。顔の色直し。同お心が解けたれば。彌々變らぬ政右衛門が。後妻のお後や。二世かけて。其方の男。地々々今夜から抱いて寝るぞや。コレ女房ども／＼といへど。お後は欠仲交り。乳母もういなうとやんちや聲。これは娘としたことが。嫁入早々往んでたまるものかいの。三々九献まだ済まぬ。殿御の盃戴くものぢや。イヤあからはいや乳母あれほしい。あれとは。ム、お餓かえ。さもししい奥様ではあるぞ。イヤ／＼

道理ぢや／＼。かはい、女房に何惜しからん。併し一つは過ぎる、半分は身が預かる。地是が夫婦の固めぞと。持たせばはや／＼餓頭醫。同ホンニ忘れた。嫁君の御持参のお道具と。地箆箭の引出し廣蓋に盛り竝べたる持遊の。市松人形風車。吹七つになる子に。殿を持たせ済ましたしやん／＼。ウタヒ濱松の。フシオス音はざんざ。地座は變らねど我が夫を。夫といはれぬお谷の心。思ひやつて居るわいの。そもじとは生さぬ中。ほんの娘の此お後と。見かへさした繼母が。掣殿に悪性根付けたと。恨んでばし下さんな。ア勿體無い事ばつかり。わたしが縁の切れるは。父様へ不孝の言譯。政右衛門殿何時迄も。あの子と添うて下さるが。家の爲志津馬が爲。わしや死する迄去られて居るが。嬉しいわいのと明かし合ふ。親子の貞心三國一。思ひは富士の郡山とけて。

フシ 涙を汲みかはず。地酒も理に入りしめくくと。フシ夜も更け渡れば。稚子が。

乳母もう寝ようと乳さがつ。同ヲ、此お子わいの。七つになる迄乳唾へる子があるものか。殿御の手前も恥ぢなされ。イヤ大事ないく。これからが新枕。腰元ども。床を取れ身も追付け寝る。コレお乳母。女房どもに尿やつて地寝さしてやりやと勞はり心付きく。乳母のお蔵が抱きかゝへ。ナリ寝所に伴ひ。入りければ。地政右衛門宇佐美が前に手を突き。改めて五右衛門殿へ御頼み。申上げたき様子あり。同サアく。役には立たずと。身どもも力に成り度い。何なりとも遠慮なう承らう。どうかく。ハア御親切忝し。地近頃申し兼たれども。同其許様には明日。切腹なされて下されい。其仔細といつば。明六つ時。櫻田林左衛門と。立合仰せ渡されし。此勝負に拙者負けます。

サア知れてある林左衛門が手の内。打つてぶち伏せるは合點なれど。勝てば御前の御意に叶ひ。これより一家中の師範仰せ付けられお暇が出ぬ時は。助太刀の望みが叶はぬ。御前に於て政右衛門。物の見事に打負け。それを越度に知行差上げ。浪人して思ふ儘。小男の助太刀致す所存。時には拙者が劍術を。吹聴なされた其許様。負けた我等が恥よりも。見損うた御恥辱。よもや生きてはござるまい腹なされにやなりますまい。これ迄厚う御最厚下され。様々御恩に預かりし。恩を仇と申さうか。腹切つて下されと。地申し出すは。五臓の血を一時に。吐くよりも苦しけれども。男の敵が討ちたさ。志津馬に本望遂げさしたいばかりに。斯様の不届を申上ぐる。御赦されて下されと。鬼を欺く政右衛門わつと。泣いたる。眞實に。感じ入つて。同ム、尤もく。

命進上申す。何よりも易い事。只残念な林左衛門めに。恥顔かゝせんと思ひしに。却つて此五右衛門面目を失うて。相果つるは悔しけれど。貴殿が本望とけたれば。骸の上で身どもが恥も。其時雪ぐ暫しの無念。誠ある侍の爲に。鐵腹一つが役に立たば。身に取つて大慶々々と。地死ぬるをフシ常の武士氣質。同アレ聞いたか。主人に預くるお命を。我々に下さる。地有難いとお禮申せ。女房どもとは。いはれぬ表。親子とも又言はぬが孝行。つて御最期も。侍同士の。お情と。互に勝つべき勝負を負くるも義心。恥辱を取つて御最期も。侍同士の。お情と。互に禮儀の中々に。フシ涙。催す八つの袖。時計の七つせはしなく。同アレ早や勝負の刻限近し。身は先へ登城致す。地用意あれ政右衛門。同貴殿のお暇出るを相闘に身どもが切腹。御邊は直様鎌倉へ出立。冥土の出立。早や参る。御苦勞。地後刻と式



禮黙禮。性急武士の短夜や。明るく間を待つ最期の門出勇んで。御前へ。三更時過ぎて。地早や明六つ。知せの太鼓。

朝日輝く大廣間。大内記殿上段の褥に着座近習の武士。各見物晴れ勝負。政右衛門は大の竹刀。櫻田は兼てより好む所の佐分利流。長柄を持つて待ちかくる。双方呼吸の透間なく先を取らんと。挑み合ふ。切先双金はなけれども。鎧を削る心の真剣。打合ふ数は帳面に。見る人々も息を詰め暫く時を。移せしが。兼て期したる。政右衛門櫻田が槍先を。あしらひ兼ねたる手の狂ひ竹刀からりと奪落され。槍にひばらるをウンとばかり。がはと倒れて俯伏に。フシ面目なうこそ見えにけれ。地勢ひ込んで林左衛門。同ナント何れも御覽じたか。陰で廣言は誰もいふ。まさか勝負にかゝつては。生兵法が役に立つ物ではない。此様な拔作を。お

取持なされた五右衛門殿。何と今御合點が参つたか。イヤハヤ天晴のお目利くと。地嘲弄譏りも覺悟の前。御前に向ひ謹んで。同不鍛錬の政右衛門を。推舉致せし不調法。恐れながら申譯と。地言ひもあへず肩衣はね退け。差添に手をかくる。同ヤレ待て五右衛門。あれ留めよ。御意ぢや。切腹先づ待たれよと。地近習の聲々。ハツとばかり暫し。フシ控へて平伏せば。同櫻田林左衛門唐木政右衛門。兩人共是へ参れ。ハア。地ハツと一度の答さへ。肩で

風切る櫻田と。唐木は枯れし萎れ枝。見すばらしげに。蹲る。同ヤイ政右衛門。只今の勝負。大内記これにて逐一見届け。其方が致し方神妙に思ふぞよと。地仰せにハツととばかり夢心地一座の。フシ不審。同イヤサ。同其方どもは今の立合を何と見た。尤も勝負には政右衛門負けたれども。始めよりつくづく見るに。身構へ太

刀割き。よつく銀へし誠の達人。林左衛門が中々及ぶ所ならず。彼が心を察するに。新参の身を以て古参の者に。恥辱を與ゆるは。武士の情にあらずと。わざと勝を譲りしは。地劍術ばかりか心まで奥床し。頼もし。同併しながら是迄。遊藝を樂しみ。武藝に疎き大名と。噂に言はれし大内記。劍術の批判覺束なしとも

言ふべきが。弓取の家に生れし身が。武藝を知らぬ様あらんや。然れども。弓が袋にし。太刀を鞘に納むるは太平の掟。今足利一統に治つたる此御代。靜謐の世に。弦を引き鉄を研ぎ。鎧よ弓よとひしめくは。上への恐れ家衰微の基。爰を思ひはかつて。茶の湯亂舞に日を暮せども心に捨てぬ劍術武藝。よく知つて居る地身どもが眼相違あらじ。同政右衛門を取持し五右衛門。身が爲に天晴忠臣誤りと思ふべからず。又林左衛門事は。怪

私の勝をそれとも知らず。いかめしく罵るは。我が藝の我がでに見えぬ鍛錬千萬。知行くれるは國の費。暇を遣はず。勝手に屋敷を立退くべしと。地案の外なる御説意に。林左衛門一句も上らず。鋭

き殿の御賢慮に。恐れ入つたる一家中。御前に叶はぬ林左衛門。早や立ちめされとせり立てられ。地したゝかな目に。大廣間一人。マシゴト立つて行く。

重ねて政右衛門にいふべきは。新參ながら其方。武藝の鍛錬感じ入る。二百石の加増申し付ける。黒書院にて改め益今より一家中の師範となり。彌忠義を勵んでくれよ。といと懇ろに仰せありしづく。御座を御太刀持の小姓引連れ入給へば。近習の面々。シザゝめき渡り。

詞さりとては政右衛門殿。けしからぬお首尾おめでたい。イヤもうお羨しう存じます。我々もあやかる爲。お盆が戴

きたい。詰所に相待ち居まする。扱々々お手柄地くんと。オトリ挨拶悦び受くる程。ぐわりりと遠ぶ胸算用。二人は顔を見合すばかり。只うつとりと手を組んで。政右衛門殿。五右衛門殿。是ではお暇は願はれまいサア身どもも折角。切かけた腹がひねになつた。コリヤマア。地どうと腰もぬけ一度に溜息次の間の。襖あらはに妻お谷。肩にかゝりし柴垣が喉に懐劍突詰めし。母の自害に稚子の。お後も跡におろく目元。二人驚き何故の。この生害イヤなうこれは覺悟の上。唐木殿の頼もしい心底を聞く上は此世に用のない體。未來へ參つて。娘お谷が勘當の訴訟今日の様子を見届けてと。此廣間のお次迄。隠れ忍んで委細の譯。思ひの外の立身でお暇の出ぬは是非

もなし。地此上ながら姉も妹も。やつぱり此方様の女房と思ひ。敵討には行かれ

ずとも。心の助太刀を。陰ながら志津馬が力になつてたべ。兄弟共さらばよと顔を。見上げ見下して。盛り梅と苔の櫻ヲシ跡に残して息絶ゆる。コレなう是と取付いて。エテ泣聲人や菊の間より。地大内記殿の御簾中。久方御前立出で給ひ。改めて殿様の御説意。政右衛門が今日の仕方。定めて様子あるべしと御窺ひなされし所。心の底に望みあつて。わざと我が手練を隠し。主を欺罔りし趣。殊に御座の次の間へ女を引入れ。御殿を穢せし科によつてお暇を遣はさるゝ。さりながら。暫しも扶持し置かれし家來。浪人の糧に盡くも不便なれば。刀一腰お暇の印に下さるゝ。殿様御秘藏の信國の名作。敵討の饒別とは仰有れぬ。賣代なし世渡りの助にせいとの御慈悲。地有りがたう頂戴しやと。小姓に持たせし刀箱。打明け申さぬ心の底。知ろし召れし御患

み。阿エ、相果てし志津馬が母。今少し生  
延はり。地此御謔意を聞くならばと止め  
フシ兼ねたる有難涙。地御座中も御落涙。  
父にも母にも後れたる。其稚子は手廻り  
で養ひ育つる三世の縁。殊更姉は只なら  
ぬお腹に持ちし大事の身。假の親分五右  
衛門の屋敷で介抱如才なう。本望とげて  
立歸り。元の主従対面を待つて居るぞと  
つどに仰せも重き亡骸は。宇佐美が  
屋敷で野送りの。供に控へし若黨武介。  
此世の名残御殿の名残。始めの妻と後の  
妻。生れぬ子にも引かるれど返す。く  
も大恩の。御前を拜し。地立出づる。世  
の有様こそ。三度ものうけれ

## 第六 沼津の段

東路に。爰も三下り取名高き沼津の里。  
富士見白酒名物を。一つ召せく襦籠に  
召せ。お襦籠やらかい参らうか。ナホス地

お襦籠くと稻村の。蔭に巢を張り待た。大儀ながらわしが寄つた所迄一走り。  
ちかける。蜘蛛の。フシ習ひと知られた。地往て来てたもと急ぎの用事走り書き。  
り。浮世渡りは。様々に。草の種かや人目。さらくくと書き認め。早うくと手



には荷物もしやんと供廻りオクリ泊りを。に渡せば。主に劣らぬ達者もの心安兵衛  
急ぐ二人連。立場と見かけ立ちどまり。逸散にもと來し。道へ引返す。稻村蔭よ  
阿コレハしたり大事の用をとんと忘れり。阿旦那。申しお泊り迄参りませうか



しませと。昔の残る風俗も。尾羽打枯れし。松蔭に。伴ひ。オクリ入るや西日影。

侘びたる中の二人住。門の柱に印の笠。

地お掛けなさるりや庭一杯。いつそ座敷

へマアお上りと。親仁が馳走娘の愛。前

垂の藍薄くとも。マアお茶一つと差出

す。こぼれかゝりし、マア葎屋葎。地折

悪う湯も沸かず。水でなりと御み足を。

詞ア、イヤ、もう行きます。親娘御

は好い器量。不躰ながら此内には。せ、

なげに咲いた杜若。よい床へ生きたいな

う。ハイどなたも左様におつしやりま

す。自慢で作つて置きましたれど。近頃

は手入が悪るさに。いかう田地が荒れま

した。何が身に構はず賃仕業。貧乏は。

苦にもせず。それは、孝行にしてくれ

ます。それで私が年寄つての雲助も。せ

めて三文なと肩休めと。餘り彼女がいち

らしさでござります。コレ父様始めての

お方に。其様なさもしい話を。ホンニ

さうぢやハ、ハ、ハ、イヤお米。今日は

大きな怪我を仕てな。コレ、これ

見よ。爪が起きてある。ア薬もあればあ

るものぢや。彼方様の薬きつい妙薬。あ

りや何と申す薬でござりますすえ。此薬は

大切な物。第一金瘡には。其場で治る

妙薬。武家方には尋ねれども。金銀づく

では手に入らぬ妙薬と。地語れば娘は猶

ほたく。詞父様の命の親。一日や二日

で。お禮は言ひも盡されず。地ならう事

なら今宵は爰にお逗留遊ばして。詞ア、

娘何言ふぞいこんな家に泊めまして。看

は干鯛が一疋なし。虱より外あなた的身

に付く物はない。イヤ、不自由は仕付

て居ります。娘御があの方に。しなつこら

しう言はしやるので。どうやら爰に根が

生えた。大事なくばいつそ泊めて貰ふか

の爰應にころりと。なれば。お枕と。油

氣はない眞身の馳走。是も一樹の笠合り。

マア尋ねる軒の。地目印當に内に入り。

詞旦那これにござりますか。サお立ちな

されませんか。ホ安兵衛か。早かつた

其方は其荷物を持つて。吉原の鍵

屋で宿を取りや。日和が知れぬ早う行き

や。地雨具の用意は吉原の。鍵屋をさし

て、マア急ぎ行く。地お米は立つて門の戸

を。引立てんとする所へ。平作殿内に

かと。ぬつと這入るは原の町の古道具

屋。詞エイ市兵衛様。御苦勞にようお出

で。イヤ此方も商賣づく。昨日此方の言

はしやるは。急な入用錢三貫。道具諸式

を直にして取つてくれといふことなれ

ど。代物見てからのことと。手附に三百

進せて。残りの錢持つて来た。駄賃出し

ては合はぬ仕事。直が出来たら此方様が

荷うて来て下さるか。時にと道具といふ

は。見え渡つた此通りか。コリヤ聞いたとはきつい相違のママ第一。放しにくいと言はしやつた故。見込に思うた佛壇が。コリヤ百が物はない。デモママちよつと置いて見よ。二つ土籠鍋釜かけて。百二十と入れい。古壘八疊で三百よ。鼠入りの膳棚百五十文。流盤は役に立たぬ。是十六文。破障子一枚十二文。縁の取れた角行燈八文。大略こんなもの。家ぐち毀つても壹貫がものはない。というて手附の三百は。飛んで了うてもうあるまい。御推量の通りでござります。せうことがない。此疊まくつて往なう。コレ若いの。そこ退いて貰ひましょと。地疊ばた／＼上げかける。申申し／＼御尤もなれど。今夜の所を御了簡と。地親子が詫ぶる氣の毒より。ひよんな所へかゝり合ひ。コレ道具屋殿。わしは今夜泊つた客。これは難儀な所に泊り合した。と

んと煤拂に茶屋へ往た様な。どうで埃はかつかにやならぬ。手附はわしが返しませよ。疊は此儘置いて貰をと。地綺麗に掛く二朱一つ是は結構な旦那殿。ちと多けれど爰迄来た賃。序に疊も引直し。まん直しに平作殿貧乏神の居ぬ様に。箒でお上。地槌で庭。菓の出ぬ前お暇と。頭きッ廻つて立歸る。地親子一度に手を合せ。忝いとも面目ないとも。嬉しいと術ない涙がごつちやになつて。お禮の詞も出ませぬと。破れ疊にッ喰付けば。阿ハテ今のは今夜の宿錢。高で知れた親子の世帯。家財を賣代なさうとは。よく／＼差詰つた。難儀な事があるのてござんせう。いとしや苦勞さつしやるの親仁殿此娘御より外に。もう子供衆はないかの。ハイ此お米が上に男の子が一人あつたれど。二つの年養子に遣りませが。又其親の手を離れ。今は鎌倉の屋

敷方へお出入。よい商人になつて居るとの噂。それ聞いてとんと思ひ切りました。ソリヤ又何故に。ヘテ一旦人に遣つたれば捨てたも同然。我が子ながらも義理あるもの。今其悴が身上が好いとて。尋ねに往て箸片し貰うては。人間の道が濟みませぬ。今出逢うてもあかの他人。子といふは此娘一人ム、それも尤も其兒貴は今幾歳位ぢやの。ハイ斯うつと。丁度今年二十八。鎌倉八幡宮の氏地の生れ。母の名はとよと書付け。守り袋に入れて遣りました。其後此お米を産んで母も相果て。則ち今日が命日で。孝行な娘が水手向花の立方御覽じやつて下さりませと。地何心なき話の合紋。一々胸にこたゆる十兵衛。思ひ合せば覺えある擬は。生みの親父様。血を分けた我が妹が貧苦の有様。有合せた路用の金。なま中親子と名乗つては受けぬ。氣質を何とがな。

金の遣りたい屈托に胸を。ッ、痛めて。  
「コレ親仁殿。何んと物は相談ぢやが。  
此娘をわしに下されぬか。エ、奉公に上  
げますのか。イヤテヤ。まだ女房のない  
男。利發な娘御。商人の噂には極上々の  
羽二重地。得心して下さるなら。仕拵へ  
はこつちから。旅商人の事なれば。呼  
迎へる日限は。未だ何時とも定められ  
ぬ。嫁入の拵へ料。爰に少々持合す。こ  
れ置いて往にまする得心かいの。如何で  
ごんす。コレよい女房。面目ないが最前  
から。わしや此方様に。地惚れたわいの  
と。ッ、しなつきかければ。地ついと退  
き。舅父様。あのお方もう往なして下さ  
んせ。いかに貧しう暮して居るとてあた  
なめ過ぎた。阿呆らしいと。地打つて變  
りし。ッ、腹立顔。阿エ、嗜め。よい女  
房と云はれるが。何のそれ程腹の立つ  
事。我が器量がよい故ぢやと。おりや嬉

しい。イヤ申し貴方様。よう御深切に惚  
れさしやつて下さりました。じやが此お  
米は女房というてはやらぬ譯がござり  
ます。ム、そんなら御亭主があるのか。  
これは。イヤ實は只今のはほんの座  
興。主のある人とも存せず龜相申した。  
眞平御免に預かりませう。コレ娘御。機  
嫌直して貰ひましょ。アノ痛み入つたお  
詞。ほんに思へば在所者を。おなぶり  
なさるを眞受にして。地お恥かしやと莞  
爾と笑ひに。ッ、心打解けて。地話に  
紛れてすつぷりと。日の暮れてあるに氣  
が付かなんだ。阿三日月様が上つてござ  
る。宵月夜で行燈はいらぬ。御燈明を伽  
にして辻堂の雨宿り。お客様も最うお休  
足延すと壁につかへる奥座敷。緩りとち  
ぢかまつて御寝なりませ。私は此臺所コ  
リヤ娘は其方に寝い且那様はお堅いけれ

なさりよも知れぬ。用心には網を張れち  
や。今夜はおれが股引をはいて寝や。む  
さけれど彼方には。地わしが布子を裾に  
など。追風もてくる。鐘の聲。オウイとい  
しん／＼と。ッ、聞えける。地お米は一人  
物思ひ。心にかゝる夫の病氣。我が手で  
介抱する事も浮世の義理に隔てられ。秋  
の螢の消残る。ホッ、佛壇の灯もほそく  
と。地嵐にふつと。ッ、氣の付く娘。阿  
奇妙に治つた父様のあの疵。今でも敵の  
手がかりが知れてから。あの病氣では思  
ひも寄らず。ム、と。地心で點頭き胸をす  
ゑ。灯の消えたるは天の與へ。夫の爲と  
拔足。ッ、さし足探り寄り。地印籠取上  
げ立退く足。願く音に目覺す十兵衛。思  
はず高聲。何者と。裾を捉へて引留むれ  
ば。わつと泣入る娘の聲。平作も悔り  
し。起上つても眞暗がり。お米。／＼と  
言ひつゝ探す。ッ、竈の埋火。地付木に

うつし顔見合せ。詞娘ぢやないか。旦那様か。何故に此有様。エ、何の因果で此様な。情ない氣に成つたぞいやい。コリヤ此親は。其日暮しの者ぢやけれどな。人様の物一文半錢。盜もと思ふ氣は出さぬわいやい。エ、親の顔迄。穢しをつたと。地わつとばかりに泣居たる。地十兵衛は氣の毒顔。詞金銀を取つたといふではなし。是には諱のありさうな事と。地問はれてお米は。フシ顔を上げ。詞恥かしながら聞いて下りませ。様子あつて言交せし。夫の名は申されぬが。私故に騒動起り。其場へ立合ひ手疵を負ひ。一日本復あつたれど。地此頃は頻りに痛み。いろ／＼介病盡せども効なく。立寄る方も旅の空。フシ此近所で御養生しい間に路銀も盡き。地地其責に身の廻り桶箆迄賣拂ひ。最前もお聞きの通り。悲しい銀の才覺も。男の病が。治したさ。

地先程のお話に金銀づくではないとの噂。燈火の消えしより。アノ妙薬をどうがなと思ひ付きしが身の因果。どうぞお慈悲にこれ申し。今宵の事は此場切り。お年寄られしお前に迄苦勞をかけし不孝の罪。今日や死なうか翌日の夜は。我が身の瀬川に身を投げてと。思ひし事は幾度か。死んだ跡でもお前の敷きと。一日ぐらに日を送るどうぞお慈悲に御了簡と。東育の張もぬけ。戀の意氣地に。身を碎く。心ぞ思ひやられたり。地敷きの端々つく／＼と聞取る十兵衛。詞コレ姉御。そんなら此方さんは。江戸の吉原で全盛の。松葉屋の瀬川殿ぢやの。ハイテモよう御存じ。すりや瀬川殿の夫の爲に。ムウ／＼と。地心の目算。思案を極め。詞イヤ太夫殿。夫の手疵を治す藥。ほしいは尤も。それ聞いては進ぜたい物なれど是は人の預かり物。此事は思ひ切

らつしやれ。今此方衆の話の通り。わしも亦恩を受けた。サ其恩を受けた人の爲に。いづれの寺でも苦しうないが石塔一つ寄進がしたいが。何と世話して下さるまいか。それは御奇特。結構な寄進ござります。何時なりともお世話致します。私も來年は噂が年忌。勸むる功德俱に成佛とやら。是非お世話致しますでござります。どうぞ今度の下り迄遠はぬ様に頼みます。兼ての願ひに。書付も此内に委しうござらんと。地金一包取出し。詞コレ必ず頼んだぞや。親子の衆最早夜明けに間もなし。随分無事に親仁殿。地と立出づれば平作も。必ずお下り待ちます。姉御さらばとばかりにて。心に一物。荷物先へ道を。フシ早めて急ぎ行く。地跡に親子は顔見合せ。金取上げてコレお米。詞随分大事にかけておきや。夜明迄は間もある。地和女も休みやと水いら



す。見廻す傍に落ちたる印籠。ア、是は今の旦那のぢや。定めて尋ねてござるであらうと。地いふにお米が手に取つて此印籠はどうやら覚えのある模様。ハテ合點の行かぬ。それかこれかとよく眺め。アホンニそれよこりや澤井股五郎が常々持ちし。覚えの印籠。地ハテ不思議なと平作も金取出しよく見れば。阿金子三十兩此書付は。鎌倉八幡宮の氏地の生れ。稚名は平三郎。母の名はお豊。コリヤコレ我が子に付けて置いた書付。そんなら今のお方は私が爲には兄様。ア、我が子の平三であつたかいそんなら最前からの親切は。それとはいはず此金を。買いでくれた石塔代。地不思議の縁と親子は暫し。呆れて。ア居たりしが。地お米は印籠手に取つて。裾端折つて駈出す。阿コリヤ待て娘コリヤどこへ。何處へとは父様。此印籠を持つて居る。其見

様は敵の手がかり。追つかけて股五郎が所在を尋ね志津馬様へ尤もぢや。が汝ではないかぬ年寄つたれども此平作。理を非に曲げて言はして見せう。汝も續いて跡から来い。どの様な事があつてもな。必ず出るなよ。敵の所在聞くまでは大事の場所。木蔭に忍んで立聞きせい。必ずとも寛恕すな。合點か北海道は廻り道。三枚橋の濱傳ひ。勝手覚えし拔道をと。地子故に迷ふ三悪道。ア轉けつまろびつ走り行く。地跡にお米は身拵へ。續いて出でんとする所へ。折柄來かゝる池添孫八。阿瀬川様か孫八殿。よい所へござんした。今夜爰に泊つた客で。敵の手筋が知れさうな。詮議の爲に吉原迄。父様が行かしやんした。イヤ忝い。シテ其行先は。吉原迄はよも行くまい。地何かの様子は道にて聞かんと。瀬川に續く池添も足に任せて。三裏へ慕ひ行く。地實

に人心さまんに。町人なれども十兵衛は。武士にも及ばぬ丈夫の魂。夜深に立ちし獨旅。ア千本松にさしかゝる。地ア、イヤ、いと杖を力に息すた。阿申し。旦那様。ヤレ。お早い足もと。フウ今呼んだは此方か。懐しう何の用。イヤ。只今のお金を。戻しに参じました。石塔料と名を付けて。大枚の金子三拾兩。其日暮しの饗助に。下さるにも譯がある。又請けまするにも譯がある。けれども。此金を請けましては。さる人が立たぬ義理がござります。これをお返し申します代りに。貴方にお頼みがござります。お聞きなされて下さりますか。ハテ一夜泊るも何ぞの約束。様子に因つて頼まれまいものでもない。地夕闇の夜の聲しるべ跡より窺ふ池添瀬川。固唾を呑んで聞居たる。阿シテ其頼みの様子は。ハイ仰しやつて下さりませ。此印籠の

主の所在を承りたうござります。これを尋ねて知りたいばかりに。さま／＼の流浪致す人。それ故娘も廓を出でて。憂き難。是が知れると本望成就。娘につれて私迄。モ、モ、モ、此上の悦びはござりませぬ。二拾や三拾のはした錢で。露命をつなく私が。死ぬる迄安樂に暮される程の三拾兩。其金銀に代へてのお願ひ。七十に成つて雲助が。ここに叶はぬ重荷を持つ。地それはまだ休みもする。子の可愛

いといふ重荷は。寝た間も休まぬ。一生の苦痛を助ける。薬の名お前様も親御が有らば。子故には愚痴になるものぢやと。地思召しやられて。願ひを叶へて下さりませ。コレ申し旦那様と。血筋と義理と道分石。わけて血の精の三界に。踏迷ふこそ道理なれ。地親の心を察しやり。阿ム、左様あらう。心底至極尤もぢやが。是ばかりはどうも言はれぬ。おれも

頼まれた男づく。其方の人が大切なら。此方にも亦大切。縦へ又在所を聞いても。命がなうては本望は遂げられまい。其方の内に落して置いた。主のない印籠の。其妙薬で疵養生。達者に成つた其上では。望みの叶ふ時節も有らう。親仁殿。

サア左様ぢやないかと。地心の掛籠一重明けぬ十兵衛が。フシ情の詞。阿サ、それ程御慈悲のあるお方。とてもことなから其薬の持主。イヤサコレ悪い合點。此薬の持主は其病人とは大敵薬。三十兩の其金。敵の恩を受けまい爲。戻したではないかいの。此持主の名をいへば。敵の薬で疵本復。恩を請けてはまさかの時。鈍が鈍らうぞや。矢張拾うた薬にして心置なう養生さしたが。よささうに思はるゝと。地聞いて平作感じ入り。阿ア、さうぢやあつた。エ、お前様は恐ろしい發明なお人ぢやの。左様聞きましては。

申様もござりませぬ左様ならもう歸りましょ。旦那様。おさらばと。地言つつ探つて十兵衛が。脇差抜き取り腹へぐつと突立つる。ヤア／＼／＼何とした／＼。コリヤ自害か。何故に。地誰を恨んで勿體な

やと。うろ／＼涙驚く娘。聲に手當てる池添が。泣音とどむる響蟲。ステテ草に喰付き泣くばかり。平作苦しき目を開き。阿俺や此方の手にかゝつて。死ぬるのぢやわいの／＼。ハテ。此方と俺とは敵同志津馬殿に縁のある此親仁を殺したれば。頼まれた此方の男は立つ。コレ／＼此上の情には。平作が未來の土産に。敵の所在を聞かして下されいの。外に聞く者は誰もない。今死ぬる者に遠慮はあるまい。地不思議に始めて遇うた人。如何した縁やら。我が子の様に思ふもの。何の此方にひけ取らず様な事此親が。阿ア此親仁が致しませうぞ。これが一生の

別れ。一生の頼み。聞かずに死んでは。

迷いますわいの。コレ拜みます。且  
那殿と。地子故の間も二道に。わけて命  
を聖斎須彌大海にも勝つたる。誠の親に

始めて逢ひ。名のるもならぬ。浮世の義  
理。孝行の仕納め。何處に誰が聞いて

居まいものでもなければ。十兵衛が口か  
らいふは。死んで行く此方様へ餓別。今

はの耳に能う聞かつしやれ。股五郎が落  
付く先は九州相良。道中筋は參州の。吉

田で逢うたと。人の噂。エ、忝い  
アレ聞いたかイヤ。誰もない

聞いたは此親仁一人。それで成佛します  
わいの。地名僧智識の引導より。前

生の我が子が介抱受け。思ひ残す事はな  
い。早う苦痛を留めて下され。親親子

一世の逢初の。逢納め。親仁様。兄。  
エ、顔が見たい。顔が見たいわい  
やい。南無阿彌陀佛。なむあみだ

くと地唱ふる十念十兵衛が。こたへ兼  
ねたる悲歎の涙。始終親ふ池添が。小石  
拾うて白双の金合はす火影は。親子の名  
残跡に。見捨てて。三、別れ行く

### 第七 關所の段

藤川の新關と人には言へど影の薈一村  
縮る松蔭に茶屋の娘のお袖とて。長地年

は二八の跡や先まだ内證は白齒の娘。雪  
氣厭はぬ寒空に。オッリ水の出花や煎じ茶

の。佛をだしに參詣人。黒谷の御上人鎌  
倉へ下向の道。山中の法僧寺に今日で三

日の御逗留。御符御札のお蔭にて。啞が  
物言ふ聲が治る。遠のお祖母が禮參り。

フシカ、御禮参りの三人が。フシ茶屋の  
床几に腰打掛け。何と太郎兵衛きつい

人群集の。扱持聞かしやれ。御符のお蔭  
で奇妙な事がござる。吉田の宿の搦栗屋  
といふ炭屋の子が疱瘡で目が潰れ。何が

一人子の事故夫婦の衆が發心して。罪亡  
しに西國に出る所へ上人様の御立寄。何  
が御符を戴くやら聞かしやれ。其夜から  
目が明きましたといの。それから吉田中  
がひつくりかへし。山中がお泊り故毎日  
の參詣人有難い事ではないか。ハテセリ

や其苦いの。炭屋の子なら黒谷様に御縁  
がある。ハ、ハ、ヤこちらも往んで縁の  
ある。地唄が炊いた御符をば。戴きませ

うと打笑ひ我が家。フシに歸りける。  
地父の教を守らざる其非科の降積る。

本フシ雪氣の空も脈ひなく。地姿を襲す和  
田志津馬。敵の行方知れざれば空しく過  
ぐる光陰の。フシやたけに心關所前。何

コレ姉様。最前より此茶店で。待合す體  
の人は見えなんだか。イエ、左様なお

方は見受けませぬ。地然らば暫しと腰打  
ちかけ。何姉様此遠目鏡は往來の慰みか。

イエ、慰みではござりませぬ。わたし

が父様は。此關の下役人。若し切手なしに拔道を通る人があらうかと。吟味の爲の遠目鏡と。地聞いて志津馬が心の當惑。差當つたる切手の用意。ハテ如何がなと思案顔。お袖は一心志津馬が顔デモ

好い男と思ひ初め。言ひたい事も。娘氣の口へ出兼る茶の花香。顔を眺めて汲む手もと。脇へ流すも氣もそゞろ茶碗ばかりを手に持つて。差出す心の思はくはッシ波んで知れかし目遣ひも。地相手に藝氣があればこそ。何是はきつい御馳走。餘り茶に福がある。然らば今一つ。とても事にほんまの茶を。いくつも

〜呑みたいと。地思はぬお茶の捨詞。何お前故なら何度でも。入端を上げたいと何と言寄る方もなく。顔は上氣の初紅葉男の生粹一森に。戀の出花と見えにけり。地志津馬も板はと心付き。ッシ我心をかけしこそ幸ひ切手の手がかりと。

心で點頭きすり寄つて。何コレお娘頼みたい事がある。ハズ何と聞いてくれる氣かと。地思うた壺へ和らかに。言ひかけられた返答の。詞に詰るが女子の情。何と返事の言葉も。何わたしもお前に頼みが。サどの様な事なりと。頼むとあれば引きはせぬ。エ、忝い。わたしもお前故ならば。どの様なお頼みでも。ッシ厭ひ

はせぬと寄添へば。何それ聞いて落付いた何を隠さう我が身のう今夜中に此關を通らねば我が一命にかゝる事。こなたの覺えし拔道を。何卒教へて貰ひたい。死んでも忘れぬコレ頼むと。地色で仕かけ我が身の大事ちつと締むれば締めかへし。恥しいやら嬉しいやら抱付いてはしめかはず。袖は人目の關の門。何暮六つからは通路ならず。それ迄に私が働き。若し間違へばわたしがお供し立退かん。必ず氣遣ひ遊ばすなと。地思ひ合うたる

他生の縁。二人が望みは二道の。一筋道を。急ぎの道中。ハズハ状箱刀に括り付け。地通りかゝればお袖は呼留め。何お飛脚様お休みと。地いへば奴が立ちどまり。何呼びかけられて姉様に。恥かゝしてよいものか。まだ八つには間もあるばい。一服せいと腰打掛け。何ヤレ〜しんどや〜。申しお客様御免なされと地いへど志津馬も何氣なうお飛脚はどれからお立ち。イヤ下拙は鎌倉扇が谷の四つ辻切通し。夜前濱松泊り日が短くて漸う此處迄と。地聞くより志津馬は心當りだまして問はんと傍に寄り。何扱々早い事。私共は何として〜。エ羨しい足もとと。地話を機會に茶の出端。一目見ると。地話を機會に茶の出端。一目見ると。地話を機會に茶の出端。一目見ると。

口飲ます氣はないか。地一目見るから戀茶と成つた。何エ、奴殿惡ちやり置かん

せ。ちやはく〜とちやゝ入れまい。こち  
やずんど眞まことのこつちや。コレイノ〜。  
そつちや向くまいどうちや〜。ア、さ  
りとは貴公も顔に似合はぬやつし形。名  
は何と言ひます。身どもが名は助平。イ  
ヤもう飯いひよりも好物だてや。コレサ。お  
娘どう仕てくれる。エ、じやら〜と。  
そんな事より此様このやうな。面白い物見る氣は  
ないかと。地この目鏡めがねの傍へ突つやられ。助平  
は差さ覗のぞき。ハアコリヤ、ッ面白いと眺め  
入り。阿あテモ大勢人が見ゆる。ハア向う  
に見えるは。ア、あれはおらが仲間の頭  
だ。コレ頭何ぞ用はないか。何ちや金比  
羅様の提灯も有る。ハア川が見える。何  
ちや藤屋の二階で客が楽しみよる。ヨ  
ヨ。味あじい事〜。ハアあの女は見た様  
な。それだ〜。ヤわりやおきのでない  
かと。地この一目見るより氣相かへ。阿あや汝おま  
は〜。ようもおれに退のり狀じやうおこし其處に

楽しんで居るな。コリヤヤイ言交はした事  
忘れはせまい。旦那へ願うて奉公引か  
し。女房に持つと思やこそ春からも一歩  
やり三歩やり四歩遣り。女房ぢやと思や  
こそ。おらが切き打うち込んで遣つたぞよ。  
コリヤ其折おらに何と言つた。お前と夫  
婦になつて夜も晝も楽しもというたちや  
ないか。それに何だ。我が見る前で尾籠おぼろ  
千萬。其男と抱かれて寝るか。よくもお  
らを欺あざしたな。鎌倉で人も知つたる澤井  
殿の家來澤井助平。地このもう了簡りやうかんが成らぬ  
わいと駈かけ出せしが。阿あハア〜。今の  
は何所だ。何だ何にも見えない。コリヤ  
どうだと。地この言ことふにお袖がさし覗のぞき。阿  
アリヤ吉田の茶屋の二階。爰から一里も  
ある所。腹立ちなさるだけが損。もう了  
簡りやうかんなされ。如何様言へば一理ある遠方か  
ら愜こ氣きするは躰からだに耳とらするに同じ。と  
は言ひながら残念と。地この又差覗のぞき。ッシ

現いまに成れば。地このこれ幸ひ扱は澤井の家來  
よなど。志津馬は邊あたに氣を付けて狀箱の  
封押切り。一通奪と取り。ッシ元の如くに  
直すのも。知らぬ助平一心不亂。打眺  
め。阿あエ、アレ口中を契くわりをる。こりや  
もう堪忍こらならないと。地このお袖が腰を力  
草くさ。阿あエ、放して下さんせ。何とこれが  
放されう。ハア〜と。地この古木こぎの如く鹹しほ  
張り返り。横にどつさり朽木くち倒し。登り  
詰しめたる奴やつ風かぜ。糸目の。ッ切れし如く  
なり。地この傍に落たる紙入の。中より出づ  
る關所の切手。見るにお袖は飛立つ思  
ひ。嬉うれしいやら怖おそいやら結ぶの神の此切  
手と。志津馬に渡せば懐なつかし。阿あ我が身  
の難儀がたは通れたが。かうして置かれぬ奴  
殿。コリヤ蟲腹むしはらか。癩か癩か病びょうか。コレ顔へ其  
水吹みづきかけたと。地この言ことふにお袖は狼狽うろた  
へて。沸返つたる茶釜の茶。天窓あまどへさつぷ  
り打ちかくれば。悔くり氣の付く助平が。

邊り見廻し起上り。さも苦しげに聲顫はし。文舞ア、どなた様か忝い生れ付いて  
悴めが蟲早く。時々おこる疵瘡子に。湯  
がかゝつて助かつたと。地話せば二人は  
類見合せをかしさ。ヲシ隠すばかりな  
り。地時も違へず關所には。打つ拍子木  
に助平が。阿一二つと。地指折つて。  
阿ム、アリアヤ七つの時がはり。大切の此  
状箱一時も早くお届申さん。地關所の切  
手と紙入の。内を搜せど。阿ヘテめんよ  
うな。南無三寶跡の茶店で落したか。地  
ドリヤ一走りと立出れど。水氣取られし  
河童奴。ふなら。くくと池水の。ミツユリ  
泥埃に逢うたる。如くにて。ヲシ元來し  
道へ引返す。地お袖は跡を見送りに。此  
間に早うと茶店の道具を門内へ運ぶ片手  
に顔眺め。見飽かぬ目鏡の戀男。志津馬  
は一心敵の手がかり。白齒娘が手を引い  
てオケリ岡崎へさして歸りける。地鎌倉

の奥女中お里歸りの道中と。人目に見せ  
る銀乗物。ヲシ關所の前へ昇据ゑる。地  
家來お傍へ立寄つて。阿お關所で候へば  
暫くこれより御歩行と。地聞くと等し  
く戸を開き。旅姿に身を變し兜頭巾に目  
ばかり出し。昨日に變る勢も溜瀾と澤井  
股五郎。邊り見廻し。阿コリヤ駕籠の者  
大儀であつた。これより早く歸つても  
れ。林左殿は何してござるな。あれへ御  
出でござります。お旦那にはお先へお通  
りなされませ。ヲ、木にも置にも心置く  
は世話人の志無足にせぬ我心底。たとへ  
我を付狙へばとて何程の事あらん。見付  
け次第に返討。わいらもちつとも氣遣ひ  
すなと。地家來。ヲシ引連れ打通る。地  
此海道を住家とする蛇の目の眼八。人喰  
馬に櫻田が。手に入り顔に先に立ち。阿  
コリヤ蛇の目。今話した事男と見込んで  
頼むぞよ。何であらうと見付け次第に合

點かエ、親方氣遣ひさあんな。此蛇の目  
が魅入れたら一寸も動かしやせぬ。ハ  
テサテ氣味のよいやつと。地紙入より取  
出し。金子千疋手に渡し。阿當座の褒美  
納めて置けさ。エ、忝い。馬士に千疋と  
は。仕合せよしの此蛇の目。何であらう  
と見付けたら。皆撫にする。一鏢と。地祝  
ふ幸先木左衛門。晩の泊りで何かの事。  
阿し合さんサア来いと。ヲシ門内さして  
入相の。地鐘諸共に關の門。門はつしと  
しむる音。宙をかけたつて政右衛門。關所  
の前に立寄れば門戸かためて出入もなら  
ず。阿暮時で分らねど。うしろ姿は林左  
衛門に違ひなし。スリヤ股五郎を同道に  
は極つた。エ、付込んだ敵を取逃せしか  
口惜しやと。地齒齧をなして身を悶え門  
内白眼付け。エテ無念涙にくれ居たる。阿  
ヲ、それよ。志津馬と爰で出合ふ約束但  
し先へ入込んだか何にもせよ出合ふ所は

一筋道。今夜中に此關越えねば。最早敵は手に入らぬと。地行きつ戻りつ思案を極め。兼て聞居る。拔道は儘に竹の林中。押分け行けば山傳ひ。探り廻りし眞暗がり。うろ／＼眼に助平がこれも窺ふ。拔道を。すかし見れば雲突く様な大男。悔り驚き身を忍ぶ。探り當りし政右衛門。竹藪押分け。忍び行く。地とつくと見届け助平が。狀箱腰にく／＼り付け。味い／＼と拔道の跡を慕うてへ急ぎ行く。地不敵なるかな政右衛門天に一命擲つて。目さすもしらぬ眞の闇。降り來る雪の道踏分け。裏道づたひ一丁ばかり行くよと見えしが。關所の内に聲高く。忍びの鳴子の音するは。裏道を越える曲者ありと。呼ばれば。地それ遁すなと捕人の人數。兼て用意の高提燈。人數を配つて取巻きしは危かりける。へ次第なり。政右衛門は事ともせず三角に眼を

睜き。岡山を食する猿松め皮引つばいでくれんすと。地段平引抜き待ちかけたなり。それ遁すなと組子ども。一度にかゝる四方詰。イヤ小癩なと振りほどき付入る所を宙にて切取り飛びくる熊手を受け流し。切立て／＼切立つれば。詞には似ぬ組子ども。跡をも見ずして。フシ逃げちつたり。地逃ぐるを追はず政右衛門。道の案内は此提燈と。勝手覚えし袖道の足跡。フシするべに慕ひ行く。跡におくれ助平は。道の勝手は方角知らず。フシうろつく折柄。地取つて返す組子どもそれと言ふにも及ばしこそ高小手に括り付け狼狽奴と夢にも知らず。組子の頭上上げ。強敵の曲者を。組子仲間へ生捕つたりと。地引立て。てこそ三度急ぎ行く

## 第八 岡崎の段

地世の中のフシ苦は色かゆる。松風の音も淋しき。冬空や。霞交りに。へへ降り積る。軒もまばらの離れ家へ。岡崎の宿はづれ。百姓ながら一理窟主は山田幸兵衛と人も心を奥口の。障子隔てて女房が積ぐ車の夜職歌。歌いとし殿御を三河の澤よ。戀の棧。文柱若。更けて忍ばし。夜は八つ橋の。水も洩さぬ手枕師も。都も小娘の。誰教へねど戀草を見初め惚初め打付て。長地雪の夜道の氣散じは互に手先折添ふる傘の志津馬に纏れ合ふ。じやらの戸口。阿ヲ、辛氣。いつもは遠う覺えたに。意地悪う今夜の早さ。まだ話が残りとはわけもない。日は暮れる草臥足。跡へも前へも雪の段。鉢の木の焚火より。地暖なそもの肌で暖めて貰ふが御馳走早うお宿を御無心と。じやれた詞に

どういうて。よいか悪いか白齒の娘。聲  
聞付けて誰ぢや。アイ、母様わ  
たしぢやわいな。ア、お袖としたこと  
が。此寒いのに何して居やる。戻りが遅  
さに待兼ねた。早う道入りやと、母親  
の。詞を機会に内へ入り、疾う歸らう  
と思ふたけれど道連のお方があつて。そ  
れで思はず夜に入りました。ム、道連の  
お方とは。アイ行暮らした旅のお方それ  
は、きつい御難儀。今宵一夜は此方の  
内に泊めて上げて下さんせ。申し苦しう  
ござりませぬ此方へお道入り遊ばせと。

地呼ばれて志津馬は怯々と。小腰屈めて  
御赦されませ。獨旅の浪人者。日は暮  
れる足は損詮方盡きて此お頼み。近頃  
わりない事ながら。一夜のお宿を御無心  
と。地言ふも心に荷物の葛籠。お袖見る  
より申し母様。父様の旅葛籠彼處に戻  
つてあるからは。ア、親父殿も今日暮前

歸らしやつた旅草臥で寝てぢやわいの。

エ、遅うても大事な目に早い事やと其跡  
は。言はぬ色目を見て取る母。日頃か  
ら二親がちよつと出ても戻りを案じる孝  
行な其方。どうやら不興な顔持は堅い父  
御の氣質故折角お宿を借りますせうとお供  
しやつた道連様へ。約束が違ふかと案じ  
過ぎてのことであらう。たとへ父御は得  
心でも。此母が不得心何故と言や。今で  
こそ茶店の娘。去年迄は鎌倉のお屋敷方  
へ腰元奉公。御主人様のお差圖で。さる  
武家方へ末々は縁に付けうと堅い約束其  
許嫁の夫を嫌ひ無理取調うて親の内へ戻  
つて間も無うみだらがあつては。以前の  
お主ばかりぢやない。顔は知らねど約束  
した婚殿へ。何の顔さげて言譯せう。サア  
斯くいふは言ふものゝ其方に限り。左様  
した事はあるまいけれど。時分の來た若  
い娘のある内へ若い男。一夜は愚か半時

でも。ひとつ所に寝臥せば戸は立てられ

ぬ人の口。其上良人幸兵衛殿。園守よりの  
お目がねにて。新關の下役を勧めまつし  
やる今の身分。常の百姓とは違うて。物  
事を正しうするも役柄故。必ず悪う聞か  
やんなやと。言はれて何と返事さへ。お  
袖が意見の相伴に。志津馬も手持投首  
を。フシカ、リ見る氣の毒さ母親も。さの  
みは如何と何氣なう。此様に意見する  
も轉ばぬ先の杖とやら。イヤ申し御浪人  
様。お心にさへられて下さりませぬ。泊  
めます事はならずとも。地せめてお茶な  
と入端を。一つ上げうと尻輕に、ッ勝  
手へ行く間待兼ねて。娘はおつゝ志津  
馬が傍。誰も來ぬ間に言殘した。話の  
残りや納戸でと。地取る手をすげなく振  
放し。見る影もない旅の者に。關所で  
の情といひ。道すがらあた嬉しい。詞を  
誠と思ひの外。許嫁があるからは。主あ



る花に落花狼藉。密夫<sup>ヒツツ</sup>などと重ねて置いて。モウ四つに。間もあるまい。夜の更けぬ中宿取つて。寝て。地花やろと立上る。袂に縫りコレ申し。詞あつて過ぎたる縁定め。今更とやかう母様の。今の詞がお心にさはつて私へ當言<sup>あつこ</sup>を。無理とはさら〜。フシ思はねど。地恥かしながら今日迄も。殿御に惚れたといふ事は知らぬあどない不束<sup>ふじゆ</sup>な。在所育ちの此身でも結ぶの神の御利生で。お顔見るから思ひ初め。詞どうぞ女夫に。地なりたいたい胸はしがらむ白川の關は越えても越えかねる戀の峠<sup>つた</sup>の新枕<sup>あたら</sup>。かはさぬ中に胸怒な。つれない事をいふ手間で。つい可愛いと一口に。言はれぬかいなとすがり寄り。しども。涙のかこち言<sup>こと</sup>。岩木ならねば流石にも。振捨てたがき戀の畏<sup>おそ</sup>。かゝる折から門口へいきせき來かゝる。フシ蛇の目の眼八。地お袖は目早く一間の

内。無理に志津馬を忍ばせて何氣ない顔。入口から羞観<sup>しゆうかん</sup>いて。詞ヤ味いぞ〜。毛蟲の親父や母者は居ず。お娘一人は無い鬮<sup>くじ</sup>な首尾と。地這入るや否や後から帯際<sup>び</sup>ほうと引だかへ。詞常から目顔で知らしてもびんしやん〜はね廻る。馬よりおれが太鼓のおち。立場<sup>たてば</sup>で驛驛見付けた様に。さんばい仕兼ねて居るわいの。否<sup>いな</sup>應なしにちよこ〜と擧<sup>あ</sup>ておくれと。フシしなだるれば。詞エ、穢<sup>け</sup>ないうるさい嫌らしいと。地突付けられても押強く。詞誰でも初手<sup>はつて</sup>はいや〜と口では言ふが。がさ汁と色事は。味覺えてから止められる物ぢやないて。それとも否ならおれも意地ぢや。今夜藤川の關所を破つて。忍び道を通つた奴。召捕<sup>まわ</sup>ようと岡崎中は上を下へと詮議<sup>せんぎ</sup>のどう中。胡散なやつとの相合傘。ちらりとつないだ此眼八。灰汁で洗うた蛇の目が詮議。ほえ煩

かゝしてこまさうと。地かけ入る向うへ立塞<sup>たてさ</sup>がる。お袖を突退<sup>つたい</sup>け立切りし。障子<sup>しょうじ</sup>引明け見て悔<sup>く</sup>り。コリヤ違<sup>ちが</sup>うたと狼狽<sup>ろうたい</sup>眼。かけ出す蛇の目が利腕<sup>りうでん</sup>捻<sup>ひ</sup>上げ。立出る主の幸兵衛。詞百姓なれど新關の下役をも相勤<sup>あひま</sup>むる身どもが居間へ。泥脚<sup>どろあし</sup>を切込む狼藉やつ簡ならぬ所なれど。所存ある故赦<sup>あや</sup>してくれる。此以後きつと嗜<sup>あ</sup>みをらうと。地投付けらるゝと思ひの外。突放<sup>つぱん</sup>したる手強<sup>てづか</sup>さに底氣味悪<sup>そこきあ</sup>くうぢ〜もぢ〜見るにお袖が嬉<sup>うれ</sup>しさと。いとしい人の納<sup>な</sup>りを心一つにとやかくと案<sup>あん</sup>じ彌<sup>や</sup>増<sup>ま</sup>す思ひなり。地弱<sup>じやく</sup>みを見せぬ悪者根性<sup>じやくしやう</sup>。お家<sup>おや</sup>にべつたり上股<sup>かみ</sup>打ち。詞役目投目と云ひはるが。其大切な關所を抜けた。科人を吟味<sup>ぎんみ</sup>する最中に。爰<sup>こゝ</sup>の娘が連れて戻つた旅の侍。引込んで置きながら。詮議<sup>せんぎ</sup>する此眼八。何故<sup>なに</sup>しめ上げて手ごめにしたのぢや。ム、娘が連立ち歸つ

たと。其侍は何處に居る。ヤア儘さつきに爰の内へ。黙りをらう。お袖にうつほれ最前より法外の有り條。承引せぬ故無法の當推。よし又其侍とやら此内へ来たにもせよ。鎌倉通行の東海道。數限りなき旅人の往來。これぞと言ふべき證據もなく。侍とさへいへば。悉く引捕へ關破りと言ふべきか。勿論汝は當所の馬追。誰が許しての詮議呼ばはり。長居ひるがば括し上げ。御地頭へ引立てうか。何と〜ときめ付けられ。ア、申し〜お氣の短い。商賣が馬方だけ。調豆から發つたいさこさで。親仁様の寢所まで。地踏馬御免とへらず口。ハズミ跡をも見ずして。フシ逃げ歸れば。地跡見送つて落付く娘。忍ぶ志津馬も一間を立出で。覺えなき身に關破りと。今の危難を免れしは。御亭主の御厚志故。忝しと。スエテ手をつかへ禮の詞にヤこれは〜痛み入

る。調先づ〜お手を上げられいサ、平に〜。承れば御浪人とな定めて仕官のお望みで上方へござるのかい。イヤ〜様子あつて世を忍ぶ獨旅。則ち當所岡崎にて。山田幸兵衛殿方へ密に參る浪人者と地聞いて不審の眉に皺。其山田幸兵衛とは身どもが事。シテ其許は何方か。ム、スリヤ貴殿が幸兵衛殿とな。拙者は鎌倉の昵近武士澤井城五郎殿に縁ある者。地委細はこれにと藤川にて。手に入る一通手に渡せば。封押切つて老眼に。つぶ〜讀むも口の内。様子知らねば氣遣ふお袖。幸兵衛とく〜讀終り。ム、某が性根を見込み。和田行家を討つて立退く澤井股五郎が力となつてくれよとある。お頼みの書面の趣。先達て鎌倉の様子承りし砌より。待ちに待つたる此お頼み儘に承知仕つた。遠途の所御大儀〜。此使を勤めらるゝ其許は。城五郎殿の御家來かと。地尋ぬる詞は敵の手筋。これ幸ひと氣色を正し。ハア幸兵衛の御懇切。承る上からは何をか隠さん某こそ。刀の遺恨止む事を得ず和田行家を手かけし。澤井股五郎と申す者さ。ア御自分が股五郎殿か。いかにも左様。鎌倉出立致せし折は。澤井殿より附人も數多あれども。人目立も如何と存じ。別れ別れに罷り上る。城五郎殿には前以て御懇意の幸兵衛殿。何とぞ御助力下さらば。此上もなき拙者が悦び。ム、さすれば貴殿が股五郎殿か。これは〜存じ寄らぬ。是迄互に御意得ねば双方共に知らぬ同士コリヤ〜娘許嫁の婚殿ぢやわやい。エ、そんなら私が鎌倉へ御奉公の其中に。ヲ、サ城五郎殿のお勤め故。其方を遣はさうと面談には及ばねど。約束致した花婿殿。能うこそ尋ねて下された。地悦ぶ聲の洩れ聞え。母も立出でヤレ

くく思ひがけない。此方が嫁殿であつたかいなう。したが氣には支へて下されな。許嫁はありながら。股五郎と言ふ名を鎌うて。今迄娘が不得心。それ故疎遠に打過ぎました。が聞いたと違うてヲ、好い男。此様な婚殿でも。其方はやつぱり否かいなう。ヲ、勿體ない事言はしやんす。許嫁の殿御ぢやと。今の今まで知らいでさへ。添ひたうてならぬもの。縁は切つてもお主のお差圖。父様や母様のお許しの出た股五郎様わたしが何の嫌ひまじよ。二世も三世も替らぬ夫。もうくこれから何方へも。やります事ぢやござんせぬ。何時までも爰に居て。可愛がつて下さんせと。心に思ふありたけは言はで思ひを押しお袖が。嬉しさ兩親も共に。ッンほたく悦び顔。地思ひがけなき許嫁の。噂に志津馬は成程成程。同上杉に仕官の中。城五郎殿差圖

にて。顔はしらねど許嫁のお袖殿であつたよな。一方ならぬ股五郎が一世の大事に及ぶ時節。御圍ひ下さらば。生々世々の御厚恩と。地わざと其身を譲り。フシ詞を盡し頼むにぞ。同イヤモ何がさてく狩人すら。懐に逃入る鳥は助くる習ひ。況して婚殿遠背はない。年こそ寄つたれ幸兵衛が。命にかけてかくまふかは。志津馬づれが付狙ふとも何程の事に別家もあれば。心置きなく打寛いで。ソレ女房娘稀の珍客何はなくと盃の用意をしやれ。アイヤく其お心遣ひ却て迷惑。ハテ婚殿の他人がましい男入やら婚入やら祝言もごつちや煎の在所料理。みしり肴の舟盛より外に馳走は。手入らずの娘のお袖が初物一種で。ホ、ハ、ハ、ハ、いかに様祖母の言やる通り。敵持の婚殿に七十五日生延びるとは。これも

吉左右目出たい。ドレく案内致さうと。地おどけまじりに先に立つ。親の手前を取らひて赤らむ顔の色直し解けて。見せても下心。許さぬ志津馬が肌刀。胸に寐刃を。相の間のオクリ襖へ引立て入りける。地既に其夜もしんくくと。ッン遠山寺に。告渡る。早や九つのかねてより。内の案内は知つたる眼八。裏から忍んで納戸口。思はず蹟く明がらの。駄荷の葛籠を幸ひとあたふた押明け忍び込み。鼻息もせず窺ひ居る。かくとは人も白雪の。道も厭はぬ政右衛門。心も關の忍び道。オクリ通れて急ぐ跡よりも。數多の捕人が見え隠れ。慕ふ足跡氣轉の唐木。兩腰そつと道端の雪掻集め押隠す。ッン際もあらせずばらく。腕を廻せと追取巻く。同ヤア仔細もいはず理不盡に。細かゝるべき覚えはないと。言はせも果てず双方より。捕つたと

かゝるを引つばづし苦もなく首筋一掴  
み。一振ふつて右左。羽腰蹴すゑて狗  
投。隙間を得たりと二番手が腕がらみを  
振りほどき。ほぐれを取つて眞逆様。地  
頭轉胴骨雪道にハズ打ちつけられてか  
なはじと。入替つたる三番手。詞打込む  
十手かい潜り脾胃を丁ど眞の當。地激し  
き手練にさしもの組子。左右なくも寄付  
かず。跡じさり。するばかりなり。  
地見兼ねてかけ寄る捕手の小頭。詞ヤア  
上意によつて向ひし我々。手向ひなすは  
關破りの。浪人者に相違はない。腕を廻  
せと詰めかくれば。ヤレ鹿忽なりお役人  
急用あつて此ごとく夜道を急ぐ旅の者。  
丸腰の某を。關所破りし浪人とは。身に  
取つて覚えぬ難題。外を御詮議なされよ  
とちつとも恐れぬ。地マシ丈夫の振舞。地  
始終を見届け幸兵衛は戸口を駈出で押隔  
て。詞憚りながらお役人へ申上ぐる。關

所破りの御詮議半ば。深夜に一人歩行の  
旅人。御疑ひは御尤も。併し此者は鎌倉  
飛脚。仔細あつて此幸兵衛能く存じ罷有  
れば。慮外の段は御容赦あり。無難にお通  
し下さらばありがたき仕合せと。地かば  
ふ詞に政右衛門。詞ムウと言ふ此方は何  
人といふを打消しイヤサコリヤ。身に覺  
えないにもせよ。お役人に慮外の手向  
ひ。ア、不屈至極と吐り付け。しづ／＼  
と歩み寄り。倒れ伏したる組子ども。引  
起して死活のいけ。詞いづれもお心儲に  
ござるか。お役目御苦勞千萬と。地苦い  
挨拶氣の付く捕人。地幸兵衛猶も威儀を  
正し。詞承れば關所を破りし科人は帶刀  
の浪人者彼は町人此丸腰。憚りながら人  
違へ。斯やうな儀に隙取る中。かの曲者  
を取逃さば。詮なき事。早々お手當なさ  
れよと。地言はれて實にもと捕人の小  
頭。詞ムウ其方が存ぜしと申す詞に相違

もあるまい。これよりは山手へかゝり。  
かの曲者を詮議せん家來地參れと引連れ  
て。元來し道へ引返す。地影見送つて政  
右衛門。詞ハ、ア危き場所を通れしも全  
く貴公の御厚志故。がお禮は重ねて心も  
せけば失禮ながらお暇申すと。地立上る  
を暫しと止め。詞昨今など折入つてお  
尋ね申す仔細もあれば。地見苦しけれど  
拙者が宅へ暫時ながらと老人の。詞に是  
非なく政右衛門然らば。マシ御免と打通  
れば門の戸引立て主の幸兵衛。傍近く差  
寄つて。詞多勢を相手に今の働き感心の  
餘り役人を敷き歸し。難儀を救ふは身ど  
もが寸志。それに付けても訝しきは貴殿  
の柔術。地正しく拙者が流儀に同じき神  
影の極意。手練せられし旅人はと訝る色  
目。こなたも不審。詞神影流の極意なり  
と双方が。ためつすがめつ見合す顔。詞

ム、お別れ申して十年餘り。相好は變られしが。生國勢州山田にて。武術の御指南下されし。要様ではござりませぬか。ヲ、其詞で思ひ出した。我勢州に在りし節幼少より育て上げし庄太郎で有らうがな。成程々々。然らばあなたが。其方が。これは。地く〜と手を打つて。盡きぬ師弟の遠州行燈へ撞立て〜打眺め。詞ヲヲ稚顔に見覚えある庄太郎に相違ない。ハテ健かに生立ちしな。ハア先生にも御健勝で。ヲ、サ。〜無事の對面互に満足。さりながら。ア、思ひ廻せば通行く月日。其方は山田の神職荒木田宮内が悴なれども。幼少の砌父母に離れ孤兒となる不便さに。手廻にかけて育つる所。稚立より武藝を好むは。末頼もしく思ふより。地門弟どもへ稽古の序。一手二手と教ゆる中。一を聞いて十を知る頓智といひ器量といひ。十五以下にて鎗術劍術。

鎖鎌。體術。柔術に至る迄。諸歴々の弟子を追抜き。神影の奥義を極むる無双の達人。何卒大家へ仕官致させ。親の氏をも繼がせんと。心頼みに思ふ中。未熟の師匠と見限りしか家出致して十五年。地便なければ折に觸れ。此庄太郎は如何なりしと。雨につけ。風につけ。思ひ出さぬ事もなく。地夫婦打寄り其方が噂。詞シテ只今の住所は何國。有付とともあらざるかと師匠の慈愛に政右衛門。思はずはつと手をつかへ。詞親にも勝る大恩。師匠を見限り家出せしと。御疑ひはさる事なれど。常々武術の御講釋。小耳に覺ゆる其中に。一派に心を凝さんより。諸流に渡り修行をなすこそ。此道の心がけと御教訓。地心魂にしみ渡り十五歳にて國を出で。普く諸國を遍歴し。詞武術を磨く武者修行。天運に叶ひ然るべき主取も致せしかど。生れ付いたる好色者。亂

酒に主人の機嫌を損じ。只今はもとの浪人。便るべき方もなければ。若し上方に有付もやと。志して參る所。地思ひがけなく先生に面目もなき對面と。メエテうかつにそれと身の上を。言はぬ底意は白裝の母。様子聞いてや一間を立出で。詞ヲヲ庄太郎かテモ成人仕やつたの。連合の眼識に達はぬ武藝の上達。器量を見込んで頼みたい。地仔細があると聲をひそめ。詞其方の家出した時は。三つ子のアノお袖。もう十七に成るわいの。縁あつて許嫁の其婿殿を。親の敵と付狙ふ者がある故。まさかの時の後楯。力に成つて下さらば。餘の人千人萬人にも勝つて嬉しう思ひます。詞ヲ、いかに〜。庄太郎と知らぬ先。雜儀を見兼ね救ひしも。其儀を頼まん下心と。師匠の詞聞きもあへず政右衛門摺寄つて。詞ムウ其付狙ふ敵の假名は。ヲ、婚といふは上杉の

家來。澤井股五郎といふ侍。付狙ふは和田志津馬と。聞いたばかり面體は知らぬども。高で知れたる若輩者。幸兵衛が片腕にも足らぬ相手。が爰に一つの難儀といふは。彼奴が姉婿唐木政右衛門といふ奴。音に聞えし武術の達人。たとへ五人百人加勢あるとて。政右衛門には及ばぬ。まだしも唐木に立合はんは。其方ならで外にはない。何とぞ婿に力を添へ。助太刀頼む庄太郎と。地餘儀なき頼みに政右衛門。先生に内縁ある股五郎殿に力を添へれば少しは師恩を報する。理。いかにも助太刀仕らう。サ、此上は澤井殿の隠れ家へ御案内と。地せき立つ唐木忍びの眼八。蓋押明けて差覗く影をちらりと見付ける幸兵衛。心付かねば。詞ヤレ。嬉しや。庄太郎の今の詞聞いたかは千人力。地ドレ婿殿へと立上るを。詞ハテ扱いらざる女の差出。股五郎殿の行

方は知らぬナハテ。壁に耳ある世の謎。それと嘘に知らねども。言聞かすには折があらう。がうかつにそれと明かされぬ。地話の蓋は取らぬが秘密と何處やら一物。歩行の小助。門の戸叩いて。申し。庄屋殿から急な御用。只今御出と。地とんきよ聲。ハア。詞また關破りの詮議であらう。いやといはれぬ。地役目の不祥と。言ひつゝ羽織引つけて。嗜む大太刀差しこなす。腰もかどみし海老鏡を葛籠にしつかと。詞コリヤ女房今も言つた話の蓋。戻つて来る迄明けぬ様。心におろした此鏡前。地ナ合點かと詞の謎。聞く女房も解けやらぬ。雪道いとほぬ高足駄。さす傘の骨組も人に勝れし岩丈作り。歩行を先に幸兵衛は。オクリ心を。へ残して出でて行く。詞戻らしやるまで寝られもせまい。糸續ぎながら話しませう。ハア今に御上根な事。マア火に

お當りなされませ。私もこれから下男同然に。お遣ひなされて下さりませ。何の此方様は大事のお客。マア煙草喫んでゆるりつと。寝轉んだがよいわいの。イエ。勿體ない師匠の内。ホンニ此煙草は何處から參つた。ソリヤ親父殿が旅戻りに貰うてござつた上方煙草。ハアあなたのお口に合ふのなら服部か國分か。此天氣にかうして置いたら濡りましよ。留守事に刻んで見ませう。地幸ひ爰に切臺庖丁。底に劍の双拵へ敵を聞出す煙草の小口。オクリ葉巻。手早くきりりと。大の體を小廻りの。奉公振も。フシあはれなり。地外は音せで降る雪に。タ、キ、無慚や肌も郡山の。國に残りし女房の。思ひの種の生れ子を抱いてはる。オクリ海山を。たどりて岡崎の。宿より先日は暮れて。ナホス何處を。フシ宿と。定めなく。がはと轉ればわつと泣く。子を

すかす手も。冷え凍る。雪の蒲團に添乳の枕。いんのこゝくに友誘ふ。犬の聲々。地夜廻りの番が見付ける小提燈。ヤイ／＼軒下に何で寝るのぢやきりきり往けと叱られて。ハイ／＼。私も秩父坂東廻る順禮。癪でお腹を痛めまする。ちつとの間置かしやつて。順禮でも幽霊でも在の中に寝さす事はならぬならぬ。意地ばるは猶胡散者。地棒いたぐくなど提燈突付け。見る様外れの尋常さ。白眼んだ眼うちかりと。細目に明るる戸の隙間。内から覗く夫婦の縁。思ひがけなき女房お谷。ハツと悔り差合せ。包む我が名の顯れ口。悪い所へ切りかけた煙草の双金。胸をフシ刻むと人知らず。フウ見れた所が。小盗する風俗とも見えぬ。此雪に乳呑子抱へて難儀ぢやあろ。何所ぞ後生氣な所を頼んで。泊めて貰はしやれ。エ、見れば見る程都合な好

い女房。一人寝さすは残念なれど。此方も寒氣に閉ぢられ。地度畑の鬼灯であつたら物を見逃す事と。咳々。フシ歸るも頼みなき。地人の詞もせめての頼み。火影を力戸口に這寄り。幼い者を連れた順禮でござります。お情に今宵一夜。地お庭の端にとばかりにて癪に。フシ。苦しむ息切の。地聲に主は涙もろく。同いとしや癪持さうな。門中に寝てはたまるまい。地泊めてしんじよと立つて行く。南無三寶と裾引留め。同ア、これは又御倉相千萬。此お燭の殿しい中。殊にお役柄の此内。何處の者やら知れもせぬに。減多に引入れ。後の難はどうなさる。急度止しになされませ。夜中に一人歩行く女子。殊な者ぢやござりませぬ。戸を明けずとばい往したがよござりませぬ。いか様なう。親父殿の留守の中は用心が肝心。コレ／＼旅人。いとしけれ

ど一人旅を泊るは御法度。御城下の中は軒下にも寝る事はならぬ程に。宿はづれの森の中へ。地往て寝やしやれと和らかに。言うて。フシ引出す糸車。歌來いと言うたとて行かれる道か道は四十五里波の上。同ハア何處へ往ても一人旅は泊てくれう様もなし。はる／＼の海山も。此子の顔を見せたいと思ふ精力で。産落すから此巳之助。漸う忌も明くや明かず。國を立てついに一夜さ。家の下で寝た事がなければ。身はならはしと山寺の。鐘がなれば寝る事にして。星の光を燈火と。思うて寝入れど今夜の暗さ。水の様な此肌で。寝苦しいは道理ぢやわいの。殊更癪で乳は張らず。雪に凍え雨に打たる。つらさは骨に徹ゆれども。且那殿や弟が。敵を尋ねる辛抱は。まだ／＼こんな事ではあるまいに。其難にくらべては。雪は愚か劔の上に

も。寝るのがせめて女房の役。氣は張詰めても此癩の。重るにつけては二人の身に。勞れの病が起りはせぬか。萬一悲しい便やなど聞いたら。何とせうぞいなう。頼み上ぐるは觀音様。弟夫の武運長久。我が子の命息災延命。未練な事ぢやが私も。此子を夫に渡すまでは生きて居たい。死にともないと。地傍に夫のあるぞとも。知らぬ不便さ喰ひしる。喉に熱湯内外に水火の責苦。雪霰。子を濡らさじと抱きしめ。天道衰れ白雪の積り重なる旅勞れ。癩と寒氣にとぢられてアツと一聲氣を失ひ。どうど倒れし物音は。肝にこたへて南無阿彌陀。南無阿彌陀佛も口の内。地今のは何ぞと主の母。戸を引明くればばつたりと。身は濡驚の目はどみたり。詞こりや眩暈が來たのぢやわいの。エ、いぢらしや如何せうぞ。夫れよ幸ひ此氣付と。地とつかは文庫に

用意の藥。ア、申しそりや御無用になに成りませぬぞえ。此儘にして放り出して。お仕舞ひなされませ。ぢやというてど見捨になるもの。アレ可愛や乳を搜し



其結構な氣付を。非人同然の者に吞まして泣くわいの。せめて此子を殺さぬ様で。それでも氣の付かぬ時は。かゝり合に。奥の炬燵で温めて遣りませう。地風



に當てじと寝衣ねいの襦袴じゅこ。あかの他人は惹  
悲深く。比翼とかはす女房を慘う引出  
し。ッ戸を。引立て。地奥口見廻し  
し足し。勝手は見置み置き釜の前。附木の明  
り見咎めて。人は何とかいひ柴しばを。そつ  
と隠して門の口。伏したる妻の氣を付く  
る柴の。ッ焚火の。あたゝまり。地嚙  
みしめる齒を押し割つて。雪に濕ぬす氣付の  
一滴ひとしずく。耳に口寄せ聲かすめ。お谷といふ  
も憚りて。心の内で呼び生ける。夫の誠  
通じてや。うんと一聲氣が付いたか。コ  
リヤ女房。ハア、マア。政右衛門殿  
かいのと。いふを押へて。コリヤ何にも  
いふな。敵の在所手がかり取付いたぞ。  
此屋の内へ身どもが本名氣振ほんなまきまでも知らさ  
れぬ大事の所。其方が居ては失望じつぼうの妨たがひ。  
苦しくとも堪へて一丁南の辻堂まで。這  
うてなりとも行てくれい。吉左右を知ら  
すまで氣をしつかりと張詰めて必ず死ぬ

るな。サア早う行け。と。地夫の詞は  
千人力。觀音様の御引合せ。お前に逢  
うたは人參熊膽じんじんくまのたま。エ、忝はづかい。坊は  
何處へ氣遣ひすな。坊主は奥で寝さして  
置いた。ソレ。向うへ來る提燈。見付  
けられな早う。とせり立つれど。  
此年月の悲しさと嬉しささうじて足立た  
ず。杖を力に立兼ぬる。とやせん側に脱  
捨すてし。藪やぶに積りし雪の儘。オッ落せて人  
目を暗き夜を。地ほか。戻る達者親  
父。同ヲ、お歸りなされましたか。ヲ、  
庄太郎寒いに門に何して居る。イヤお歸  
りが遅い故。お迎ひに出かける所。ナン  
ノ迎ひには及ばぬ。こりや門口に柴の燃  
えさし。非人どもが業わざである。地不用心  
など見廻す提燈。イヤ私わたしがと取る拍子。  
地態とばつたり。同コリヤ龜相。だんな  
い。きつい風です。道で取られう  
とした。まだま好い所で火が消えた

地言ふもこたへる疵持つ足。天氣も大方  
上り口。庭から足あし拭く下駄直す師匠思ひ  
に。ッ機嫌顔。同イヤ馴染程結構なも  
のではない。これから緩ゆるりと夜と共話さ  
う。いよ。最前頼んだ事。遠變はない  
の。これはお師匠とも覚えぬくどいお尋  
ね。心元なう思召すなら。鈍刀でない  
魂たまを。只今金打かねうち。ア、コレ何のそれ  
及ぶ事。及ばぬとおつしやつても。お頼  
みなさるゝ本人の。股五郎殿の所在。御  
存じないとおつしやるは。お師匠の詞に  
鞘かたがあらうかと存じられ。頼まれるに力  
がない。ナント左様ぢや。地ござりませ  
ぬかと。探る心の奥より女房。稚兒抱き  
走り出で。同コレ親おやに殿最前行倒れの順  
禮が。抱いて居た此乳吞兒。今肌を明け  
て見れば。守りの中に此書付。和州郡山  
唐木政右衛門子。巳之助と書いてあるわ  
いの。ヤア。地と幸兵衛立寄つて。誠に

誠に。シヤア好い物が手に入つたぞ。敵の悴を人質に取つて置けば。此方に六分の強み。敵に八分の弱みあり。股五郎殿の運の強さ。其鬼魄随分大事にかけ。乳母を取つて育てるが。計略の奥の手と、ツシ悦び勇めば。地政右衛門ずつと寄つて稚兒引寄せ。喉笛貫く小柄の切先。幸兵衛驚き。阿コリヤ庄太郎。大事の人質何故殺した。ハ、ハ、ハ、此悴を留置き。敵の鋒先を挫かうと思召す先生の御思案。お年の加減かこりやちと懺が戻りました。武士と武士との職業に。人質取つて勝負する卑怯者と。後々まで人の嘲り笑ひ種。少分ながら股五郎殿の。お力になる此庄太郎。人質を便りには仕らぬ。目指す相手政右衛門とやら言ふ奴。其片われの此小悴。血祭に差殺したが。頼まれた拙者が金打と死骸を。ツシ庭へ。投捨てたり。地幸兵衛手を打ち。ハ、ア尤も其丈

夫な魂を見届けられたれば。何をか隠さう。股五郎は奥へ来て居るわいの。祖母婿殿を起しておぢや。コレ、股五郎の片腕に成る頼もしい人が来た。言うて爰へ呼んでおぢや。スリヤ。澤井股五郎殿は此内に居さつしやるか。フウシテ。外に連の衆でもござるかな。イヤ、供もなしたつた一人。奥底なう話したも。地打明け語るは思ふつぼ。何條知れたる股五郎。手取にするは易かりなんと。手ぐすね引いて待つ大膽。志津馬は女房が案内に股五郎が片腕とは。何奴なりとも只一討と鯉口くつろげ居合腰。氣配り目配り互にきつと。阿ヤアこなたは。直り。阿唐木政右衛門和田志津馬。不思議の對面満足で有らうなと。地先がけられし二人より。思ひがけなき女房が心どぎまぎ不審顔。阿ナント老人の目利もや違ひはせまいがの。今宵澤井股五郎と。名のり来る年配恰好。聞及びしとは拔群の相違。扱は却つて付狙ふ。志津馬か但し餘類の者か。肌赦させて詮議せんと。態と一ばい喰うた顔。三寸組板見ぬいたれど。我が弟子の庄太郎が政右衛門といふ事を。知つたは漸くたつた今。骨柄といひ手練といひ。あつばれ股五郎が片腕にせんものと。頼めば早速承知しながら。股五郎が在家を根を押して。聞きたがるは心得ずと思ひしが。地子を一刻りに刺殺し。立派に言放した目の中に。一滴浮む涙の色は隠しても隠されぬ。肉身の恩愛に始めてそれと。ツシ悟りしぞよ。地澤井にさせる思はなけれど。阿娘お袖を。城五郎方へ幸公に遣はした時。筋目ある人の娘。末々は我が一家の。股五郎と。娶合せん。ヲ、いかにも頼み申すと。つい言うた一言が。今更引かれ

ぬ因果の縁。其後娘は奉公引いて歸りし  
かど。今落目になつた股五郎。見放され  
ぬは侍の義理。地隠匿ふ幸兵衛ねらふは  
我が弟子。悪人に與してくれと頼むに引  
かれず。現在我が子を一思ひに殺した  
は。劍術無双の政右衛門。手ほどきの此  
師匠への言譯さりとては過分なぞや。其  
志に感じ入り。敵の肩持つ片意地も。  
最早これ限只の百姓。町人も侍も。地變  
らぬものは子の可愛さ此方は男のあきら  
めもあり。最前ちらりと思ひ合す。順禮  
の母親の。心察しやらるゝと。悔めば門  
に堪へ兼ねてわつと泣く聲内よりも。明  
くる戸直に轉び入り。あへなき骸を抱き  
上げ。詞コレ巴之助。物言うてたも母ぢ  
やわいのく。地昨夜までも今朝まで  
も。憂い辛い其中にもてうち仕たり藝づ  
くし。父御によう似た顔見せて自慢せう  
と樂んだもの。逢ふと其儘刺殺す。慘た

らしい父様を恨むるにも恨まれぬ。前生  
にどんな罪をして侍の子には生れし  
ぞ。こんな事なら先刻の時。母が死んだ  
ら憂目は見まい。佛のお慈悲のあるなら  
ば今一度生返り。乳房を吸うてくれよか  
しと。庭に轉びつ道廻り抱きしめたる我  
が身も。フシ雪と。消ゆべき風情なり。  
地志津馬涙拭ひ。詞此上は包まん様な  
し。とてもものに眞實の。敵の有所を。  
何がさて。此方も隠しはせぬ。有様は此  
幸兵衛。最前庄屋へ呼ばれた時。股五郎  
に逢うて來た。ヤアすりや敵は庄屋の方  
に。地心得たりと駈け出すを。政右衛門  
引とどめ思か。詞我々爰にあると聞  
いて。暫時も此地に足を留めう様がな  
い。はや五六里も行過ぎて、もう爰に敵  
は居ぬ。此行先も用心して。海道筋へは  
よも行くまい。道を變へて落ちたと見え  
る親仁様。何と左様でござらうがな。し

たり黒星其通り。とても非道の股五郎。  
天道の御罰にて。どうで討たるゝ者なれ  
ども。此岡崎で勝負さすれば。肩持たね  
ばならぬ幸兵衛。藥師堂の山越に中仙道  
へ落したは。城五郎へ一旦の情股五郎と  
の縁もこれ迄。思はぬ方便が縁になり。  
地志津馬殿と言交はした。娘が身の果。  
不便やと。見れば籠の小蔭より。思ひ切  
髪墨染の。袈裟に變りしそぎ尼姿。詞お  
袖か。ヲ、出かしやつた。悪人の股五郎  
に。假にも女房と名の付いた。其間違ひ  
が其方の不運。地可愛や盛りりの黒髪を。  
詞アコレ申し。もう何にも申しませぬ。  
顔は見ねども許嫁の。男持つのがうるさ  
さに。屋敷を戻つた其時から。尼になる  
氣で袈裟衣。地今日一日に氣が變り。染  
違うたる鏡髪付を元の白齒と墨染に。染  
直しても剃しても思ひ染めた煩惱の。心  
が兀けぬ佛様。御赦されてと身を背け。

泣かぬッ氣を泣く親心。地股五郎にも  
志津馬にも縁を離れたお袖道心。袖振合  
ふも他生の縁。子に別れた順禮に菩提の  
爲のよい道連。關副役人の我が娘。關所  
々々も切手入らず。中仙道への。案内者  
地勝手に連れて行かれよと。娘に敵の道  
引を。さすが子故に踏迷ふ。未來の契り  
鉦撞木。涙で渡す父母の。恵みも。深き  
觀世音。南無阿彌陀佛南無阿彌陀。我が  
子は冥土の道しるべ。志津馬唐木も恥合  
うて。悄れぬ表。ッ武士の禮。師弟は  
内證敵同士。此儘歸るは虫性者。返せと  
一聲切付くる。得たりと請ける牛蓋に馬  
士の胸切重切。詞まつ其通りの手柄を待  
つ。まだお手の内は狂ひませぬ。ハ、ハ、  
ハ、やがて。地吉左右くんと笑うて。祝  
ふ出立は侍なりけり。三置

## 第九 伏見の段

詞男どもく。ソレ洞の間へお蒲團は入  
つたかな。ハイ艦の間の四人様水菜は爰  
に置きます。コレ船頭衆此荷物破物ち  
やぞソレ氣を付けて貰はうと。地世話は  
素焼の土産物積むより早く押出して。舟  
を見送り御機嫌ようお下りなされとそこ  
そこに。夕日程なく吳竹の。伏見の里の  
船着場。軒を並べし舟宿の客に。ッ絶  
間もなかりけり。地世の憂を何と志津馬  
は此處彼處。敵の行方尋ね兼ね心氣。勞  
れた眼病を。いたはる瀬川も諸共に。暫  
しは爰に宿りして。北國屋が奥二階。手  
を引連れてそろくと。梯子ををりし  
も。ッ黄昏の。地人なき隙を幸ひと透  
見廻し。詞イヤ申し志津馬様二階ばかり  
もお氣詰り。月の夜すがの川景色見やし  
やんすのが目の養生と。地介抱如才撫で  
さする。心遣ひぞ。ッわりなけれ。詞  
イヤモウ何ばう養生しても抄々しうもな  
い眼病。見かけに變りなけれど。今日  
此頃は此様に。其方の顔さへわかり兼ね  
る。ぶら〜月日を過す中。主人上杉公  
急病にて御死去遊ばされし由。御存生の  
中に敵も討たぬ残念頼みに思ふ政右衛  
門殿。武介諸共引別れ大阪へござつた  
故。此伏見に逗留するも若しや敵の。ヲ  
これはしたり思はず知らず大きな聲  
で。コレ〜誰も聞いて居なんだかと。  
地堂にも心奥口へ。聞え憚り差寄つて  
ッシひそ〜咄す店先へ。地志津馬に連  
れて孫八が忍ぶ姿の按摩取。頭巾すつぽ  
り船着の宿屋々々の門口から。按摩よこ  
さい。ヲ、孫八殿コレ〜瀬川様。さり  
とは物覚えの悪い。我等按摩取の勘兵  
衛。必ず鹿相仰しやるなど。地言ひつゝ差  
寄り小聲になり。詞若旦那のお供して。二  
三日以前から此伏見に逗留して。思ひ付  
いた按摩症癖。毎日々々此船宿。入込んで

氣を付くれどさしてこれはと申す様な手がかりもござりませぬ。それは左様と若旦那ちとお目はようござりまするか。ヲ、孫八の心遣ひ忘れはせぬ。某とても此程より歩行はならず。出入の旅人に心を付けて寝へども。敵の行方知れざる故次第に重る眼病は。地口惜しさよとばかりにて打怖るればお道理と。潮川も涙孫八も。共々目に目をすり居たりしが。詞アアさりとはお氣の弱い。何の神佛様が無いにこそ。アレ天道が正直なれば。御孝行な心が届いて。御本復も本望も今の中でござりましよ。其様に思召すは養生の大きな毒。ヤ毒の序に潮川様。兎角病人は介抱が大事。お如才あるまいけれどお若い同士。何よりかよりお持合せの彼の毒忌が肝心でござりますハ、ハ、ハ、ハ。ヤこれから上手の宿屋を廻つて。後程お見舞申しませうと。地言ひつゝ立つて表

口出るより早く聲張上げ。詞按摩技辭。鍼の療治と。地覗く隣の。ヲシ八百屋の店。地奥の間よりのかく〜と出づるは櫻田林左衛門。詞ア、旅勞れで殊の外頭痛がする。幸ひの導引一つ頼まうかい。ハイ〜左様ならお座敷へ。イヤ〜表を見るも又氣ばらし。苦しくない爰で〜。成程それも宜うござりましよ。ヤ旦那御免なされませと。地庭から直に店の間へ上る孫八櫻田も。互にそれと面體を知らねば何の氣も付かず。詞イヤコレ療治人。身は随分きついが好き遠慮なく揉んでくりやれさ。ハイ〜ア、きつう凝つてござります。さうしてマア見受けました所がお歴々様。骨組と申し丈夫なお生れ。嗚お力も強かるな。アノ兵法とやら劍術とやら。定めて抜てござるぢやあろな。ヲ、汝達が目にも左様見ゆるは尤も〜。天が下廣しと雖も。某に立會は

ん者は恐らく覺えない。成程左様に見えます。さうしてあなたのお國は何國で。何處へお出でなされます。ム、身どもは西國方の者なるが。智謀劍術勝れし故。高木風に倒るゝ習ひと。傍輩の讒によつて浪人して永々と漂泊せしが。サア身ども程の達人がをらぬは國の弱みとあつて。此度歸參を仰付けられ。先知の上で過分の御加増。故郷へ歸る曠の道中。數多ある供廻りは別宿に控へをれば。跡荷物の揃ひ次第明晝船にて下る積りと。地口から出次第幣上を。隣の店に漏聞く志津馬。詞アレ潮川あれを聞きや。同じ武士の身の上でも衰へると榮うるは是程にも違ふ者か。心を盡して尋ね搜す敵には廻り逢はず。困窮の上此眼病よつく武運に盡きたかと。地悔むに潮川も共涙。ほんに思へばおいとしや。沼津でお別れ申してより。お跡をしたひ尋ね逢ふ甲斐

も長しい日は立てど。地これぞと思ふ手がかりもないを苦にして此様に。ほんに悲しい病を目より。傍で見ると私の心が。推量して下さんせと。ステかこち歎くを此方には。聞耳立つる櫻田が。兩耳びつしやり。詞ア、コリヤ何とする放さぬかやい。ア、お前様も辛抱のない。斯う致して引きさげねば。お頭痛が直りませぬわい。ハテ仰山な按摩だな。シテコリヤ何といふ流ちやぞい。是は南蠻流の隣の今宮流でござります。ハア聞えたそれで、野にするのぢやな。ハ、、、コレ瀬川。したが其様に案じてたもんな。此宿の亭主が引合せて。隣に逗留してござる限醫者竹中贅宅老の加減の薬。湯煎に立てて洗うてたも。地アイと言ひつゝ、かい立つて。勝手へ入つて汲んで出る。夫に盡す貞節の。心は清き清水焼。白湯に振出し、差出せば。地始終聞き

居る林左衛門。詞の五音心得すと。延上つて差覗くをちやつと兩手でめんない千鳥。詞ア、コリヤ、何とする目が見えぬわい。又これも今宮流か。イヤ、か、か、か致して置きました。ト一時に手を放すと。何とお目のはつきりとなつてよござりましょがな。是を名付けて天照太神天の岩戸開きと申します。何を馬鹿なことを。したが氣裂な按摩取。シテ其方が名は何といふぞい。ハイ私は板屋勘兵衛と申しまして。此間大坂から上りました。貴方もお下りなされたら。外を差置き芝居へお出なされるである。アア面白い事でござります。コレ則ち爰に持つてをりますが役者の番附。お慰に御覽じませ。ムウナニこれが役者の番附。ハイ。三下、大坂土産に何を貰うたナ。申し役者の番附日傘でござります。詞ムウナニ日傘。チエ日傘。シテそちが假

名は板屋の勘兵衛。チエ板勘兵衛。ナニ板勘兵衛。ハ、、、ヤ是からお下をやりましょが横におなりなされませぬか。イヤ、下の療治は後程頼む。料物も一所にくれろ。中々氣裂な男め故。長旅の鬱氣を散じた。地さらばこれから夕飯の宿屋の知行に有付かう。勘兵衛後にと櫻田は刀提げ立上り。一間へ入れば孫八は上の、フシ町へと急ぎ行く。地道摺違うて何處かは。飛脚と見えて門口から。詞ハイどなたぞ頼んませう。是のお客林新五様へ大坂からの此状と。地聞くより志津馬は覺えの替名。詞ヲ、これは、則ち拙者林新五。直々に請取りました。ハイお返事をなされるなら。追付け取りに参りましょと言捨て。フシ飛脚は立歸る。詞コレ瀬川唐木殿よりの此書状。何事ぢや讀んでも。地早う、に封じめ解き。覺束ながら押開く。襖の内より林

左衛門。差足拔足表口。戸脇かたわきに隠れて立  
聞くと。心付かねば。詞ことばテモ扱も政右  
衛門様のお氣の付いた。私でも讀める様  
に假名交りの此手紙。ナニ〜彌やま御無  
事と存じ候。然れば敵の落足おちあしとどめん爲  
大坂川口の出口々々は門弟ども數多付け  
置き油斷なく手當致し。我等事は武介諸  
共尼が崎兵庫の邊りに待受候間。其地にて  
變りし事も御座候はゞ。早速御知らせ下  
さるべく候。此由申入度早々以上。スリヤ  
政右衛門殿には大坂を立つて兵庫の邊り  
へ參られしか。此方よりも委細の譯。返事  
に委しく申送らん。コレ瀬川爰は端近奥  
の間で。大儀ながら書いてたも飛脚の來  
ぬ中。サア早う。地ちアイと瀬川は夫の手を  
引連れ遣入る後影いごかげ。地ちとつくと親ひさて  
こそ〜。和田志津馬に相違なし。踏込ん  
で討放さうか。ハテ如何はせんととつお  
いつ思案半ばへひよつか〜。一僕さへ

も内證の。薄いを黒める木綿の居士衣。  
見るから蕨井の竹中贅宅。療治りょうぢ。フシし  
うて戻り足。地ちそれと見るより。詞ことばヲ、  
これは〜隣座敷のお侍様。コリヤ端近  
にござりますな。ヲ、昨晚ちよつと御意  
得申した贅宅老。サこれへ〜と片脇  
へ。招き寄せて聲をひそめ。詞ことば今朝も申  
す如く。隣家に逗留致して居る若侍がア  
ノ眼病。貴殿が療治召さるゝに就き。折  
入つて頼みし密事彌やま御承知下さるゝ  
や。イヤモ御大身のあなた様のお頼み。  
お禮物さへ慥ならば。先づは過分。然らば  
打明けお話し申す。仔細あつて某始め別  
宿に逗留致す。組の者どもへ仇ある奴やつ  
と。夜前よるまへより心を付くるに。身どもが推量  
ちつとも違はず。彼が實名知つたる上は  
討つて棄てんと思へども。彼者に力を添  
ゆる劍術無双の曲者ある故。我々が手に  
かかる時は却て此身の有所ありさまも知れ。帯紐

解いて夜が寝られず。サア〜頼むとい  
ふは爰のこと。何卒貴公の働きにて毒藥  
を藥と偽り。彼奴が眼の見えぬ様に何と  
手段はあるまいか。此事成就致しなば一  
廉お禮を仕らう。地ち先づ頼みの印と懐中  
より。金子の包取出し些少。フシながら  
と手に渡せば。詞ことばヤアコリヤ金子五十  
兩。テモ結構なお印やな。隣の病人治なごし  
たとて高々貳朱か。よろしくて百足は覺  
束ない。ほんのこれが牛を馬に乗換へた  
と申すもの。後ともいはずたつた今。我  
等が秘方の毒藥を。差すが相圖に兩眼よ  
り。五臟へ浸込しみこむ腐り藥。ちやくと用意  
致して置いた。コレ刀入らずに了うて取  
るは此贅宅が手の中にある。エ、早速の  
得心満足致した〜。必ず手ぬかりなき  
様に。イヤモお氣遣ひなされますな生か  
す覚えはなけれども殺す事なら此方こなたが得  
物。委細はあれから御覽ごらんじませ。地ちいか

にもよきにと打點頭うちあたまうき。膝ひざし合して店の間の障子引立て窺うかがふ櫻田。何でもしめたと贅宅が。物に懸りの掴み頬ほ。上べに見せぬ贅骨の。扇あふぎばちく隣の店。詞ヤ贅宅でござる。御見舞申すと。地聲に志津馬は一問を出で。ヲ、これは御苦勞千萬。扱あお歸りを待兼ねました。ヲ、さうでござらう。晝からお見舞申す筈が。御存じの流行醫者。あそこからも竹中。爰こゝからも贅宅様。活藥師いかりちやと持囃して。漸おそう只今罷歸つた何と晝の洗ひ藥で。さつぱりとよからうがの。イヤさして變つた事も。ハテめんような。アノ藥でよい筈ぢやが。ドレく今一度診て進ぜうと。地行燈引寄せ灯明あかりに。ためつすがめつ透し見て。詞コリヤ内痔立うちちやわいの。これなら洗藥では行かぬ筈。コリヤ取つて置きおの點藥を。出さずばなるまい。コレ大切だいせつな藥ぢや程に。うつかりと

思はしやんなや。氣遣ひ召さるな。今の間に本復もとさして進ぜうと。地こてく取出す藥箱。詞ア、是はよいお方にかゝり合はして拙者が仕合せ。此お禮は本望を。イヤ追付け本復致したら急度致すでござりましよハテ心遣ひさつしやるな。醫道いどうは仁術じんじゆつ人を救ふは醫者の役ぢや。サアもそつと此方へ寄らつしやれと。地片手に睚ひげ押明けてすくふ件の毒藥は。直に志津馬が命を斷つ匙しの刃金の點藥。忽たちち毒氣廻ると見え。詞ア、嚴げんう此目がヲ、痛む筈。しゆむかししゆむで有るがの。少しの間ぢや忪おそへさつしやれ藥眩いびん眩せざる時は。其病治せずと申して。一旦動かねば藥師が活して進ぜる。ドレ。地其間に一服致さうと。煙管取上げすつぱく。すつぱの骨頂こつてい。ヲ納めた頬付ほ。志津馬は苦痛堪へがたく。詞申しくこれ迄の藥

とは違うて。五臟までも泌渡り。いかう苦しうござりますと。地聲に瀬川も走り出で。もしお藥は違ひはせぬか。お心儲こころたねに持たしやんせと一方ならぬ。詞介抱けうに。地じろりと詠め。詞うつそりどもめ。今藥ぢやというて點したのは。汝が目を潰さうばかり。おれが秘法の毒藥ぢやわやい。ヤアくそんなら今の様子があらう。様子はと。地立上れどもよろくく。詞瀬川何處に居やる。瀬川爰こゝが苦しいく。地せつないわいのと夫の惱みを見る悲しさ。あるにもあられず縫ぬいり付き。詞そんならお目かもう見えぬか。ハアヤイ啗欲醫者の鬼め。魔王め。地すたに刻んでも恨みは晴れぬとしがみ付く。小腕取つて膝に引敷き。詞ヤイくくばたくと刎廻つてももう叶



加減を。地ヲ、篤とこれにて見届けたりと。物陰より林左衛門したり。フシ顔に歩み出で。詞和田行家が悴同苗志津馬。

無念にあらうな。ヤナニ某を和田志津馬と知つた此方は。ヲ、澤井股五郎に力を添ゆる。伯父の櫻田林左衛門。其方づれが股五郎を討たんなどは及ばぬ事と。地

聞くより扱はと道寄りく。敵の片われ通さじと刀の柄に手をかくるを。襟がみ掴んでくつと捻付け。詞ヤア劍術無双の

此櫻田に双向はんとは。小賢しい。蚊蜻蛉侍。捻り殺すは易けれど。某始め股五郎が所在を知られては一大事と。贅宅に

申合せし身が計略眼も見えぬ分際でも。見事親の敵を討つか。相手は大敵其上

に。城五郎殿のお心付にて。劍術勝れし侍數多付添ふ股五郎。所詮叶はぬ事だとかきらめ。首でも縊つて死ばれと悪口雜言足にかけ。踏付けられて無念の齒き

り。詞エ、侍のあるまじい卑怯未練の此仕業。親の敵の股五郎に。縁を引いたる其方が。土足にかけられ手向ひも。ならぬは此目が見えぬから。地エ、口惜しや無念やと拳を握り男泣き。見るに瀬川が

氣は狂亂。詞目かいも見えぬ志津馬様に。惨い辛い大悪人。地天道様の明かな。お目にはこれがかゝらぬか。詞孫八殿は何してぞ。地神も佛も恨しやと聲を

限りに泣叫ぶ。詞エ、やかましいわい。コリヤ眼の見えぬばかりぢやない。毒氣が五臓へ廻るが最期。追付けこ

ろり百兩の。褒美がほしさの仕事ぢやわいやい。ヲ、贅宅が働きて此志津馬めを了うて取り。待伏ひろぐ政右衛門め。

鼻明かすのが此方の方便。荷物内に忍ばせ置きし股五郎にも落着かせ。うぬらば苦痛を肴にして一献酌まう。ハレ好い態と踏飛ばし。駈け行く鑓をしつかと取

り。詞すりや差す敵の股五郎は。ヲ、身どもと一所に昨日よりこれに逗留致し居るわい。エ、忝い。今こそ敵の在所が知れた。志津馬様。嚙御本望と。地ぬつと出でたる池添孫八。主従一度に身繕ふ。

詞ヤアく。コリヤ汝眼が見えるな。贅宅こりやどうぢややい。ヲ、目醫者となつて入込みし。此贅宅が本名は。孫八が兄池添孫六。志津馬様と言合せ。

明かな兩眼を自病と偽り汝が俗姓敵の行方知らん爲。首尾よう參つた櫻田殿と。地言はれて悔り。詞ヤ、ハ、スリヤ

股五郎を見出さん爲。言合せであつたよな。地此上は一味の者へ告知せんと駈け出づる。敵の加擔人逃さじと拔手も見せず主従が。烈しき手練の働きに。さしも

の櫻田敵はじと。ハ、旅宿をさして逃込んだり。ヤアいづく迄もと孫八志津馬。駈入らんとする奥の間より。どつこいな

らぬと呉服屋十兵衛。かけ隔て支ゆるを。血氣の志津馬が鋒先に。肩先すつぱり切下げられ。フシうんと倒るゝ其隙に。地奥を目かけて駆入るを。同ヤレ暫くと聲をかけ。地濱邊に繋ぎし笥舟より。船装束を其儘に。武介引連れ政右衛門。フシしづくと歩み出で。同手に入つた敵なれども。爰では討たれぬ仔細あり。町人ながら義心ある十兵衛が此深手。地非道に與せし先非を悔ひ。志津馬が手にかゝりしは。本望ならんとありければ。手負はむつくと起上り。同ヲ、御推量の上は我が所存。今更くどく申すに及ばず。股五郎始め一味の者ども。西國へ落失せては。御本望の妨げと。政右衛門様の計略にて。最前の似せ飛脚を。誠と心得裏道より。地巨椋堤を伊賀越に。志州鳥羽の港より。大廻しにて九州相良へ。落失せんとの言合せを。同お知

らせ申して相果つるが。志津馬様へのせめての寸志。町人なれども。敵の端くれ。股五郎に頼まれた。一つの命を此上ながら。ヲ、瀬川が事は政右衛門が。刀にかけて志津馬に添はす。ハ、武士の鑑の政右衛門様。其御一言は。呉服屋が冥土の晴着。サアく片時も早くばつ着いて。此年月の御本望。早くくくと氣をいらつ。地手負に取付き妹が敷くを制して政右衛門。同ヲ、いかにもばつ着き討留めんは我



が掌たてこの中なかにありと。地志津馬が亡君上杉殿の御家門たる畠山。政治家よりすゑ置かれし。同宇内公の石碑ある伊賀路に於て本望達する物ならば。地泉下ちせんかにまします顯定公。行家殿への追善ならんたとへ。何百何十人。彼に力を添ゆるとも。天理に背く敵の助太刀。何條恐るゝ事あらじ。時は初更はつせいの戌の刻。先へ廻つて伊賀越に。多年の本望今此時と唐木が勇めに力足。手負を跡に三つ瀬川。三途の瀬ぶみは。敵の魁かみ。さらばくを夜嵐に聲吹分くる海道筋跡を。慕うて 三重みへへ急ぎ行く

## 第十 敵討の段

地されば唐木政右衛門股五郎を付出し。夜を日に繼いで伏見を出で伊賀の上野と志し。先へ廻りて代官所の届けも済みて北谷の。四つ辻に主従四人。フシ我劣ら

じと入来る。地政右衛門聲をかけ。同孫八武介は我に構はず志津馬を圍へ。我豫て聞及ぶ。

股五郎には附人ある由目ざす敵は只一人。地

たとへ助太刀何十人あるととも。何程の事あらん。最早来るに間も

あるまじ身拵へをと

フシ制すれば。地志津馬は今日を一世の晴業。心得たりと片肌脱げば。南蠻鎖の差込に鎖鉢巻。拜領の不動國行覺えの名作。

同じく唐木も立附たてつけに薙の鉢巻信國の寐刃ねいばは兼て合詞。いづれ劣らぬ。古今の勇士。

池添石留引添うて。日頃の念願指す敵を今や來ると。フシ待ちかけたり。地程

もあらせず。股五郎悪黨ばらに前後を圍はせ。一番手は林左衛門。さゝめき渡り



我一わがと。フシ小田町筋へと打通る。地斯

くと見るより和田志津馬木蔭より飛んで出で。向うに立つて大音上げ。同ヤア

ヤアいかに澤井股五郎。汝が手にかけし和田行家が一人同苗志津馬。此所に待受

けたり。尋常に勝負せよと聲かくれば政右衛門。ホ、久しや櫻田林左衛門。郡山

にて真劍の。勝負を望みし其方今日に至つたり。サア覺悟せよと呼ばはつたり。

地心得たりと林左衛門馬上より飛下りるを。走りかゝつて政右衛門。肋骨より肩先かけて切付けたり。ソレ通すなと聲々に。一流を得し附人ども志津馬を目當て切りかくる。心得たりと池添石留四人を相手に切結ぶ。地股五郎志津馬は一騎打。兼て手練しゅれんの和田志津馬。爰に顯はれ彼所に切抜け。飛鳥の如く早業に。股五郎もあしらひ兼ね突かける鎗先を。鏝せりに受留められ。跳退はなはざりになつてたち／＼。坂の下へと引いて行く。地こは心得ずと團四郎。股五郎を救はんと勢ひ込んでかけ行く所へ。どつこいやらぬと政右衛門。仁王立に突立つたり。シヤ邪魔ひろぐなと打ちかくる。心得たりと受流し。付込む所を身をひらき。飛ぶよと見えしが團四郎。から竹割に切伏せたり。返す刀に助太刀ども一人も残らずすくひ切り。志津馬が身の上氣遣はしと。

二人の家來を跡になし坂の下へと飛んで行く。孫八武介は死物狂ひ。數多の付人相手に取り切つ切られつ戦ひしが。數箇所の手疵に目も眩くらみ同じ枕に死してけり。地股五郎相手に和田志津馬。手利と手利の晴れ勝負。いづれ抜目はなき所へ。政右衛門が韃駄たて天走り。助太刀の奴ばらは一人も残らず討留めしぞ。残るは其奴只一人。ソレ踏込んで討留めいと地聲の助太刀百人力よろめく所を付入つて肩先ざつふと切付けたり。こは敵たかはじ

と股五郎死物狂ひと働けども。動ぜぬ武士の太刀風に。さしもの澤井も切立てられ。しどろになるを疊みかけ。鋭いっき一刀大地へどつさり。起しも立てず乗りかゝり。年來ひんねんの父の敵。舅の敵。主人の仇。地一度に晴るゝ胸の月。空そらに知られし上杉の。家の譽れと悦ぶ唐木。武名は世々に鳴りひゞく。和田が手疵も日を追つて。やがて全部十册物。この上もなき敵討今に譽を残しけり

天明三癸卯年四月廿七日

作者 近松 半二  
近松 加作